
Summer Vacation

如月りお

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S u m m e r V a c a t i o n

【Nコード】

N 9 4 9 0 C

【作者名】

如月りお

【あらすじ】

高校に入って初めての夏休みを迎えたかりん。みんなは部活にバイト、そして彼氏と充実した日々を過ごしているのに、かりんには何もない。自分だけが置いて行かれたようで焦るかりんの遅すぎる夏が始まる・・・！

第一話：恋に恋して

「だあーっ！もうダメ、休憩しようよ、修兄。^{しゅうにい} ちょっと休憩、ね。」
「オマエ、さつきもそう言って、アイス食ったばっかだろうが。
この問題解くまではダメ。」

「もう、修兄のケチい。そんなんだからカノジョできないんじゃないんじゃん。」

「なにをお！そう言うオマエはどうなんだよ。」

「アタシは、別にっ・・・」

「別になんだよ！」

こんな言い合いはいつものことだけど。

なんでかな、この頃、ドキッとしてしまっただよね。

そう、修兄のカノジョの話になると・・・。

修兄はご近所さんで、優しくて、カッコよくって、小さい時から大好きなお兄ちゃん。運動音痴な私とは違って、テニス部のキャプテンで、おまけに成績優秀で。

いつも女の子が周りにいて、ヤキモチやく気にもなれないくらい。

中学の時から始まって、カノジョがいない期間なんてなかった。今は、たまたま、進学してすぐだから、決まった人がいないだけの話。この夏休みから、高校に入って難しくなった数学とか理科の勉強を、理系の大学に進学した修兄に週一で見て貰っている。

修兄のバイトが休みの日で、夕飯済ませてからだから、8時頃から始まって、その日の気分次第で終わりの時間はマチマチ。かなりアバウトな家庭教師だ。

全然関係ない話で、かなりの時間を無駄にすることも多い。

そんなとき決まって、恋話になるのは、お互いそういうお年頃だもん、しょうがないよね。

修兄は大学でテニスサークルに入っただって。そのサークルの先輩が気になってるらしくて、最近はおっぱらその話。

「やっぱ大学生は違うね。大人だよ、やっぱり。」
いつも同じようなことばかり言って。

よくいう『大人の女の魅力』ってやつに、やられちゃってっるって感じかな。

私から見れば、修兄だって十分大人なのにね。

そんな私の気持ちなんてお構いなしに、その『レイナさん』って先輩の話は続く。

さすがにちよつとムカついてきて、

「そんなに好きなら告白しちゃえばいいのに！」

って、意地悪を言ってみた。

すると、意外にマジに返事が返ってきて。

「レイナさんってさあ、どうもカレシと別れたトコみたいなんだよなあ。」

だって。

「よかったじゃん。チャンスなんじゃないの？」

って言ったら、

「うーん……。別れたっていつでも、相手はサークルの先輩でさあ、

向こうが社会人になって時間合わなくて、仕方なく、みたいな別れ方だし。

心がまだ残ってんのがわかるんだよな……。」

ちよつと、そんな切ない顔しないでよ。

「頑張つて！」なんて励ましてもうソになりそうで、何も言えなかった。

「修兄、今日のデザート何？甘いモノ食べたら、元気出るでしょ。」
とことんお子ちゃまなふりするしかなくて。

コンビニでバイトしてる修兄が持って帰ってくれた、賞味期限ギリギリのデザート達。

勝手にテーブルにどんどん並べ始める。

「じゃんけんして、勝った方から好きなもの取っていくんだよ。」

「オレはどれでもいいけどさ、部活もしないでそんなに食っているのか？」

ちつとは気にしろよ、体重とか。」

意地悪そうに笑って、私を後ろから羽交い締めにして持ち上げてみせた。

「重い。」だって。

修兄のすることは、時々際どくて参ってしまう。

私だって、もう結構お年頃なのに、修兄にとっては、まだまだ子供なのだろうか。

難しい問題に正解すれば、頭をなでくれて、私が甘えれば、修兄のアイスを一皿食べさせてくれる。

修兄が疲れたって言って、膝枕をねだってくることもあるし。

私一人でドキドキするのは悔しいから、ヘーキな顔するけど、内心はもう心臓バクバクでどうしようもない。

私のことからかかってるのかな？

聞きたいけど、それだけは聞けない。

聞いてしまうと、もうこんな恋人ごっこみたいなこと？全部終わってしまいそうで、黙ってるしかなくて。

そんな疑問も恥ずかしさも、何もかもなかったことにして、

「よし！勝負だ、修兄。」

始めてしまえば、こっちのもの。

私がどこまでも無邪気な子供でいれば、修兄も笑ってってくれるかな。

第二話：夏が始まる

他に楽しみなんて何にもなかった。

望月かりん、15歳。

高校に入って初めての夏休み。

もつとワクワクするような出来事が、いっぱい待ってると思ってたのに、現実はず違った。

もう三分の一が過ぎようとしているのに、ただ暇で暇で仕方なくて、毎日暑いだけの夏休み。

週一回、水曜の夜の修兄しゅうせいの家庭教師だけが、私にとっての唯一のイベント。

友達はいんな、ここぞとばかり彼氏と毎日遊んでんだろーな。

メールしても全然返してこないし、もう、いちいちケータイ見るのもバカらしくなって。

ホント女同士の友情なんてあてにならない。

なんであたしは暇なのかって、そう、彼氏がいらないからなんだ。

『ま、それだけが理由じゃないのは、わかってるんだけど。』

みかはクラスのコと付き合い始めて、ゆうきは部活の先輩と、中学からつきあってるコもいれば、

友達の紹介で・・・ってパターンもあるし。

高校生になっただんだもの、当然、周りには新しい出会いがいっぱいなのに、

なんで？ 私にはないわけ？ そうゆうの。

そりゃ、運動音痴をいいわけに部活には入ってないし、親がうるさくてバイトもやってないけど、

それでも高校に入ったら、新しい通学路、新しい教室、新しい友達ができる、カッコイイ男の子に巡りあうハズ・・・

だったんだけどなあ。やっぱ塾の夏季講習でも行っとけばよかったかな？

なあってヨコシマな反省してたら、グルルル・・・とお腹のなる音。一体今何時なのかもわからないけど、体の方はわかってるみたい。

「お母さん・・・は行っちゃったよね、仕事。」

重い足取りで階段を降りていくとリビングのクーラーは当然切られてるし。

「うつそ、あっちー。」

冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出しつつ、クーラーのリモコンを押した。

壁のカレンダーを指でたどって、

「ええっと、今日は、火曜だから・・・」

残念。修兄に会えるのは明日だ・・・。

確か新しいデザート、CMでやってたよなあ。

修兄と二人で、品評会しながら食べるの楽しみなんだよね。

って食べ物のこと考えてたせいかな。

もう一度、グルルル。

時計はもう十時半をまわってるんだもん、当然だよな。

喉を通り過ぎる水の冷たさにクラクラしながら、一応メールをチェック。

「新着メールあり」

久しぶりに見たよ、この文字。

えーっと？みかからだ。

「今日暇してる？プール行かない？」だって。

うふふつ。私は思わず口元がほころんだ。やっと私にも予定ができたのだ。

しかもプールだよ！！なんて夏らしいイベント！

新しく買った水着、まだ一回も着てないんだよね。

やっとこの日が来たよー！。

おっと、うれしすぎて返信忘れるとこだった。

「行く行く！！って今起きたんだけど。間に合う？」

そつ、時計はもうすぐ十一時。

「十一時半に駅だよ。ヒロ君の友達も呼んだから。」

「えーっ。」

私は思わず声をだしてしまった。みかと二人じゃないの？友達って誰？

なんでよりによってプールなの？恥ずかしいんだけど・・・

色んなことを考えながらも、とりあえずパジャマ代わりのＴシャツを脱ぎにかかる。

後三十分で何ができる？とりあえず朝食はぬきだよね・・・。
もう洋服も選んでられないよー。

クローゼットを開けて、目に付いたワンピースを頭からかぶった。

お姉ちゃんのだけどいいよね。着替えるのラクだし。

「バスタオルに・・・日焼け止め、あとは何があるんだろ？」

口に出していつてみるけど寝起きで頭が回らないせいか、いつこうに準備が進まない。

「どうしよう、間に合わないかも」

なんで起こしていつてくんなかったの？って、思わずお母さんを恨みつつ。

駅まで自転車でダッシュすれば五分で着くはず。時計は十一時二十分。

メイクもいい加減に玄関の鍵を閉めた。自転車にまたがって、

「あつ。ケータイ忘れた。」

もうカンベンしてよ。これで１分はロス？

今度こそ大丈夫だよ、忘れ物ないよね。

気を取り直して自転車をこぎ始める。

だんだんスピードがでてきていい感じ。

いつもはウンザリするほどうるさいセミの声も、今日は夏らしく思えて許せた。

ようやく、私の遅い夏が始まるうとしているみたいで。

せっかくノツてきたところで、目の前の青信号が点滅して赤に変わる。

変わるとわかつていいるのに、間に合わないなんて！

我ながら体力なさすぎだわ・・・。

ブレーキをかけながら、『約束には間に合うからいいよね』なんて、自分で自分に言い訳しまくりで一休みしてたら、

「おい」

って後ろから誰かの呼ぶ声。私じゃないな。

「おいってば。」

って、もう一度。

早く誰か振り向いてあげたらいいのに。

汗だくの顔をあげたその時、キキキー。

銀色の自転車ブレーキ音と共に、私の横で止まった。

「おはよう。」

逆光で、その顔は良く見えなかった。

けれど私には声だけで誰だかわかってしまっで、そのまましばらく動けないでいた。

信号が青に変わっても。この暑さの中、フリーズしたまま。

「行くぞ。」

そう言っで、私の目の前を彼の背中が小さくなっていく。私は慌ててペダルを踏んだ。

彼、早川孝は私の高校生活の中で、唯一新しい出会いと呼ぶにふさわしい、

現在、気になる男の子第一位である。

サッカー部に所属する彼は、学期中に既に、かなり日に焼けていたけど、

今日久々に会ってあまりの黒さに笑いそうになった。

だって歯だけがやたらと白くて。

この暑いのに毎日部活なんて、ホント信じらんないワ。

彼を好きなのかどうかはよくわかんないけど、

よくいるサッカー小僧のように、髪を染めたり伸ばしたりしていいところはとりあえず好感もてた。

それにしても、『あれ、こんな時間になんで？今日部活休みなのかな・・・、私服もカッコイイかも』

ぼんやりした頭で、ぐるぐると同じ事を考えながら、足はひたすらペダルをこぐ。

『どこ行くのかな？』

朝食を抜いたのがマズかったのか、もうバテてきちゃってる。おまけに上り坂で、

『追いつけない、もうムリ』。

ふらふらしながら顔を上げてみると、さっきのT&CのTシャツ？

「おせえぞ！！」

つて、待っててくれた？私を？

心臓がバクバクいつてるのは、自転車こぎすぎたせい。

顔が赤くなってるのも、自転車こぎすぎたせい。

なわけないけど、それでも平気な顔しなきゃ。

早川とは中学から同じだったけど、一度も同じクラスにならなくて、顔と名前は知ってるって程度。

だから初めて話したのは高校入ってから。

同じクラスになって、隣の席で、正直、第一印象は、あんまり・・・かな。

かっこいいって有名だったから、みんなには羨ましがられたけど、きつとヤな感じのヤツなんだろうなって、勝手に思ってた。

『俺ってカッコイイ。』つて、自分で思ってるようなヤツ？

まあそれが誤解だつてことがわかるのに、時間はかからなかったんだけど。

どうしてなんだろ、キヤーキヤー言うまわりの女の子にも興味なさげだったからかな？

こないだも言ってたしな。

「サッカー忙しくて彼女作る暇ねえよ」つて。

そんな一言に、ガッカリしたり安心したりしてる自分がいて。

「おはよー。」

よかった。普通の声が出た。

「お前もつバテてんだろ。体力なさ過ぎ。そんなんで泳いだりできるのかよ。」

え？

今、

「泳ぐ」って言った？泳ぐってどこで？・・・プールで？

この坂を下れば、もう、駅なんだけど・・・、

「もしかして、プール・・・？」

カラカラの喉が余計に乾いて、声にならない。なぜかニヤニヤしながら頷くアイツ。

この怪しい笑みに気がつく余裕は、この時の私にはなくて・・・

「あんたって、ヒロ君とどういう・・・」

二人そんな仲よかったっけ？

まだ頭がはつきりしない。栄養不足の上に酸素まで不足しているから、

働かせようとする方がムリなのかも。

「ああ、アイツとは中学から塾で一緒でさあ・・・」

その先の話はもう耳に入ってこなかった、というか聞いていなかった。

塾なんて私の生活リズムの中にないから見落としてたワ。

なんてことだ。テキストな服にテキストなメイクでテキストな髪で早川に会っちゃって、

それだけでも終わってるのに、そのままプールまで一緒に行くなんて！！しかも水着だよ。

なんで教えてくんなかったのよ？みかのヤツ。来るのが早川だったこと。

怒りと恥ずかしさでカーっとなってきたと思ったら、あれ？突然目の前が白く光り始めた。

目の中で小さな花火がいくつかがあったと思ったら、目の前の景色が、テレビの砂嵐みたく、どんどん細かい粒になって、

「キーン」って耳鳴りの向こうからアイツの声がした。

「おい、お前大丈夫か。おい、望月、望月っ・・・」
ドサッ。ガッシャーン。

私が受け止められる音。自転車が倒れる音。

そこから先は蝉の声だけが聞こえていたような・・・

第三話：はめられた二人

「うーん・・・。」

なんだかくすぐつたい。なんだろう。

うつすら目を開けると、タオルをバタバタさせて、懸命に私をあおいでくれている早川がいた。

「あ、れ？なんで？」

状況が理解できていない私に、

「お前がいきなり倒れるからだろ！仕方ねえから、ここまで運んできたんだ。」

あ、自転車はとりあえず置いてきたからな。」

「えーっ。自転車置いてきたの？」

「当たり前だろ。氣い失つてるヤツ一人残して行けるかよ。」

だいたい普通はありがとうって言うのが先だろ。」

ごもつとも。荷物はちゃんと持ってきてくれてるし。」

「ありがとう。重かったよね・・・。」

「重いつていうより恥ずかしいんだよな。お姫様だっこっていうの？」

だんだん声が小さくなる。

照れてるんだ。カワイイ。

なんて思いながら、自分がお姫様だっこされてるトコ想像してみた
ら、

こっちも恥ずかしくなってきた、

「ごめんね。恥ずかしいよね。」

って小さな声で言った。なんか顔見れないよ。

「お前さ、・・・朝飯食ってねーだろ。」

うっ。声が怖いよっ。ごめんなさい・・・

それにしても、今顔赤くしてたのに、もう復活してるよ、悔しい。

「人間の体ってよくできてるよな。氣い失つても腹は鳴るんだも

んな。」

「ふーん。すごいねえ……。」

「つてそれってもしかしてあたしの事ー？うそーっ！」

思わず飛び起きそうになって、クラクラしてあきらめた。

信じられない、というより信じたくなかった。うそでもいいからう

そだつて言つてよ！

「他に誰がいるんだよ。ま、俺も腹へってんだけど。」

クールに言い放たれては、もう開き直るしかない。

「何よ。その分軽かったんだから、よしとしようよ。」

「なんだよ。逆切れかよ。ったく、これだから女はやなんだよ。」

そう言いながら立ち上がると、

「ちよつと待つてろよ。」

そう言つて、公園の外へスタスタと出て行つてしまった。

やつてしまった。謝らなくちゃ。どう考えても私のほうが悪いんだし。

もしかして怒つたのかなあ。なんて言つて謝ればいいんだろ。

（ん、眩しい……）

アイツがいなくなつて、やっと周りの景色を見回す余裕ができた。正確に言えば、アイツがちょうど光を遮るように座っていたから、私はその心地よい日陰の中で、人の目も気にすることなく、まどろんでいられたのだ。

（優しいな。）

それにしても ここつて見たことあるような……

公園？確かさつきよりまだ坂の上にある……

私が横になっているベンチにはちゃんと日よけもあつて、足元にはバスタオルがかけてあつた。

（優しい。）

こういう所が優しいんだよね。

でも、それは私が特別なわけではなくて

ただ誰にでも優しい罪なヤツなんだよね、この男。
しかも、自分で全然それに気が付いてないんだもんなあ。
こんなヤツの彼女になったら、毎日不安で仕方ないかもしれない。
行く先々でいろんな女の子に優しくして帰ってくるんだから。
(もちろん女の子だけじゃないのだけれど)
でもそこがイイのかもね・・・なんて矛盾してる。

そういうトコちょっと修兄しゅうけいに似てるかも。

「オマエ好きなヤツとかいないのか？」

修兄に聞かれた時、一瞬、早川君の顔が頭に浮かんだ。

「オレなんかいっぱいいたけどなあ。」

どっちかというと、いっぱいいて悩むタイプだったな。うん。」

「いっぱい、ねえ。」

修兄の好きなタイプってどんな女の子なんだろう。

そんなことボンヤリ考えてたら、また蝉が鳴きだした。

「おい、起きられそうか？」

ずいぶん頭の上から声がしたと思ったら、自転車に乗ってるんだ。

「お前のも取ってくるからちょっとこれ見て。」

そういつてまた走っていく。

後姿に

「サンキュ」って言うてみた。

聞こえるわけないか。

そういえばさつき、

「これだから女は」って・・・

女。ちよつと胸がズキつと痛む。誰なんだろう？お母さん、お姉さん、

妹、彼女。

アイツの言う女って一体・・・

って、ダメダメ。完全に恋愛モードに切り替わっちゃってるよ。

あたしとアイツは友達なんだから。いや友達っていうより、ただのクラスメートか・・・

とにかくスイッチ入れなおさなくちゃ、普通にしゃべれないよ。考えるのはヤメにして、起き上がってみることにした。

（一体今何時なんだろ？みか達心配してるだろうな・・・）

ゆっくりと体を持ち上げながら、頭を振ってみる。

うん、大丈夫みたい。

カバンの中をのぞいたら、ケータイがチカチカと点滅してるのが見えた。

新着メールあり。

「遅いから、先に行くね。あと、男の子もまだだから、駅で待ってあげて。」

何これ・・・冗談？じゃないみたいだけど・・・

この期に及んでまだ『男の子』とか言っちゃってるし。

だいたい遅いつてまだそんなに時間経ってないんじゃないん？

現在ケータイの時間表示は12:03だから、33分の遅刻・・・

はは・・・これは遅すぎか。一体どれくらい寝てたんだろ。

その間ずっと私のことあおいでくれてた？

「おい。」

いいこと教えてやるつか。」

きつとヒロ君からもメールがきたんだろう。

片手でケータイ振り回しながら、私の自転車に乗ってるアイツ、何だか変な景色だ。

「もう知ってる。」

こっちもケータイ振り回して見せた。

「なあんだ、ジュース飲むか？」

ちよつとがっかりして言うと同時に放り投げられる缶ジュース。冷たくて気持ちいい。

「あ、お金・・・」

「それぐらいおごるよ。」

ラッキー。

「いただきまーす。」

ペコリとおじぎしたら、

「くくつ。今時そんなこと言うヤツもいるんだ？」

バカにしたような笑い方。感じ悪い。

「なに？なんかおかしい？普通だよ、当然でしょ。ちょっといつまで笑ってんの！」

どうにも怒りきれない自分はずかしくて、言葉がキツくなる。
やばい、顔にやけてないかな。

「お前すぐムキになるのな。おもしろいよな。」

バカにされた上にかかわれてるし。

「・・・」

どうしよー！何だかうまく言い返せないよ。

教室では平気な顔で話できて、この状況はかなりヤバイ。

制服じゃないし、学校じゃないし、何より二人きりだし！

あせればあせるほど心臓バクバクだよ。とにかく沈黙だけは避けなきゃ。

「ったくあいつら最初から待ってる気あったのか？」

ほつ。向こうから話してくれた。

でも、そういわれてみると怪しいかも。

まさか、みかつてば・・・

最初からコイツと二人きりにさせる気だったんじゃない・・・？

なあんてね、そんなわけないか。そんな無茶なこと、いくらみかでもねっ。

だいたい早川のこと好きなんて、一度も言ったことない！

まあ、何度かつっこまれたことはあるけど・・・

「かりんってわっかかりやすいよね！」

みかの声が聞こえてくるようだ。

何がわかりやすいんだかわたしにはさっぱり。

今こうして早川が気になり始めたのも、半分はみか達の暗示にかけられたようなもんだし。

どんなに否定しても、みんなして、

「絶対怪しいよね。」とか、

「仲いいよね。」とか、

「つきあってるのかと思った。」なんて言うコまでいたし・・・

そりゃ嫌いじゃないし、話してて楽しいけど、

だからって

「好き」とか、

「つきあいたい」とか、そこまでは正直わからないっていうか・・・今のままじゃ、ダメなのかな？

「俺らが邪魔なら誘わなきゃいいのにな。」

目が相づちを求めてたから、慌てて頷いた。

なるほど、そういう意味か。そっちのが正解だわ。

自分本位な早とちりに思わず耳がかーっとなる。

「あたしのせいだね。ホントごめん。」

まさかの意味も込めて、とりあえず謝ることにした。

「ま、いいんじゃないの？」

あ、またニヤニヤしてる。何なの今日は？こんな顔普段見たことない。

「さあ、どうやって弁償してもらおうか。俺の貴重な夏休みを！」

何のことだかさっぱりわかんないって顔して見せたら、

「俺また明日から部活なの！毎日サッカー漬け。」

あーあ、今日楽しみにしてたのになあ。水着の女の子でいっぱいプール。」

横目でチラ見したら、嬉しそうな顔しちゃっててコワイよ・・・。間違いなく何か企んでる顔だ。いったいどんな償いさせられるの？こんな事なら簡単に謝らなきゃ良かった。

「あ、俺、海行きたいんだけど。夏と言えば、プールもいいけど、やっぱ海でしょ。」

ちよつと待つてよ！なんか訳の分からない方向に話が・・・。

「は？今からそんなトコまで行つてたら、遅くなっちゃうよ。無理無理。」

「なんだよ。世界一暇なくせに！それとも何か予定あるのかよ。」
グサリ。いきなり核心ついてくるとは。

「失礼ね！私だつて色々あるんだからね。忙しいんだから、色々・・・」

「ふーん、色々ね・・・。ま、どーでもいいけど早く行こうぜ。時間もつたいねえぞ！」

「ちよつ、ちよつと人の話聞いてんの？ねえつてば、ねえ〜！」

第四話：隣の席

結局断り切れなかった。

にしても、なんて強引なの！そしてそれに逆らえない自分がいる。もう少し一緒にいたい気持ちを、認めざるを得ないのが悔しい。

『見透かされてる？絶対付いてくると思われてる？』

簡単なコだと思われたくない、余計なプライドが、私に笑顔を作らせないでいた。

「そろそろ見えてもいいのにな。」

揺れる窓の外ばかり見てるアイツが腹立たしい。窓に映ってる自分の顔はもつと。

どうしてもはしゃげない。せつかく来たのに、楽しめない。

こういうときホントに恨めしいよね、自分の性格が。

傷つきたくないって、全神経が訴えてるみたい。

電車の中は、平日の昼間だからか、人はまばらで、

私たちはガランとした車内の、暑苦しいベルベット地の椅子に、少し離れて座っていた。

電車に乗り込んですぐは、

『こんなのもデートって呼べるのかな？みか達に感謝しなくちゃね。』

なんてウキウキして、

『私にも何かが起こるかも』

とさえ思ったのに。

扉が開いて、誰かが乗り込んでくる度に、

『私たちってどう見えるのかな？なんで私を誘ったんだろう？』

って、なかなか着かないから、なんだかどんどん考え込んでしまって、

・

『そっいえばメアドもケータイ番号も交換したきりだし・・・これって友達以下かも？』

ああ、もうダメ！恋愛モード全開だ！早くスイッチ切らなくちゃ。考えちゃダメなんだ。とにかく、話してれば大丈夫、なはず。

「あ、そういえばもう夏休みの宿題終わったー？」

「まだ。」

「みかとヒロ君、もう泳いでんのかなあ。」

「だろうな。」

「今年の夏って、去年より暑いような気がするんだけど」

「よく喋るなあ、お前。」

え。

なんかその言い方ムカつく。

「そんなに頑張ってるじゃべなくていいから。黙って座ってるよ。」

何なのそれ！そんなのもっと早く言ってるよ！

アタシがどれだけ苦労して、話題思いつく限りしゃべって、

沈黙が訪れないように頑張ったと思ってるの！

悔しくてちよつと泣きそうだった。

その時は、彼の言葉のホントの意味に、気が付く余裕などなくて・

・

「わかった。もううるさくしないから。」

聞こえたかな？なるべく低い声で、呼吸を落ち着かせて言った。

じゃないと震えが伝わってしまいそうで、泣き声に変わってしまい

そうで。

「は？」

やっぱり聞こえなかったか・・・

「うるさいなんて言ってないし。ただ、お前が無理にさ・・・」

言いかけて、言葉を探しているように、視線をさまよわせる。

しばらく考えて、彼は言った。

「なんかいつもと違うから、調子くるうつつか・・・」

教室で隣に座ってるのとおんなじだろ？今だって。」

「わかった。」

もう早くこの話題は終わらせなかったから、とりあえずそう言って、

うつむいた。

ホントは全っ然わかんないんですけど。

教室とおんなじって？ふと横を見たら、肘をついた姿勢で、ぼんやり窓の外を見てる。

いつものポーズだ。

『確かに同じだわ。』

どーせ授業なんて聞いてないんだもんね。

私の話の方が、無視できない分厄介かも？

なんて考えてる間も、ずーっと横顔を見ていたら。

あれ？なんか違和感。

そっか。左右が逆なんだ。だから、見慣れない横顔。

いつも教室で、アタシは左側から早川の横顔を見てるんだ。

ふと、さっきの言葉が頭をよぎる。

「そんなに頑張つて・・・、

無理に・・・、いつもと違う・・・。」

うーん、ここ引つかかるんだけど、なんでかな？

どんどん自分一人の思考の中に沈んでいこうとしていた私を、思わぬ彼の一言が引き戻す。

「無理に連れてきて悪かったかな。」

グサリ。穏やかな口調だけれど、それがかえって胸に刺さった。

この言葉だけは言わせなくなかったな。きっとアタシが困らせてるんだね。

「全然！平気平気。あたしも暇だし。」

できるだけ元気に言ったつもりだけど、嘘にしか聞こえなかっただろうな、今の。

もう言葉が続かない。お願い、誰か助けて！

そのとき、

「お！見えたぞ！見えた！ほら、見てみる！おいつてば。」

海だった。

流れていく木々の中に、ときれときれに顔を出す、キラキラ光る波

のかけらが、だんだん大きくなる。

「すごい！きれーい。やったあ。」

「だーから海のがいいって言っただろ！うおーっ、やっぱいいよなあ。」

窓を大きく開けて、身を乗り出し、私たちは子供のようにハシヤイだ。

「お前、やっと笑ったな。」

「え？」

「電車乗ってからずーっと、コワイ顔してるからさ。」

「え？」

言われなくてもわかってるっつーの。

こっちはそのコワイ顔と、ガラス越しににらめっこしっぱなしだったんだから。

（あれ？よく考えたら、早川も、今やっと、笑った？）

アタシの緊張がうつつちゃったのかなあ・・・

「お腹空きすぎて、ちよっと気持ち悪くなったただだよ。」

でも窓あけたら、すーっとした。何か元気出てきたみたい。」

「よおーし。んじゃ、泳ぐぞーっ。」

「その前になんか食べたいんですけど・・・。」

「わかってるって！溺れられたりしたら、こっちが大変だからな。」

いつもの私たちらしい会話がやっとできた気がして、ほっとする。

ずっとギクシヤクしてたのは、私が変に意識しすぎてたせいなんだ。普段通りの私でいいって言いたかったんだなあ、きつと。

他に言い方あるだろうって気もするけど、まあいいと言えらしいのかも。

憎まれ口叩きながらも、実は結構優しいヤツ。

じっと座ってられないのか、座席から立ち上がって、

ドアの前に立っている横顔から目が離せなかった。

キュンって胸がしめつけられて、ずっと見ていたい気持ちが出て、もうそこまで海が近づいてるのに、このままもうちょっと乗ってい

たいような。

乙女心は自己中心的だね、自分で言うのも何だけど、でも、早川のこと、なんとなく

「好きなのかな？」ぐらいにしか思っ てなかったのに、
どんどんホントの

「好き」になつてゐる気がするんだけど、気のせいかな。

こんなに長い時間二人でいたのは、初めてだけど、なんか居心地いい感じで。

その気持ちに素直にならなきゃダメなんだ、きっと。

なぜか今日はそんなふうに前向きに思えた。

積極的にはなれなくても、後ろ向きになる必要ないよね？

第五話：偶然

海の家で水着に着替えながらも、私の心の中はどんどん議論を続けている。

夏休み直前の昼休み、お弁当食べながらみんなで話してたこと、思い出したりして。

いつものことだけど、みんながカレール好きなの話しても、何か、イマイチノれない私。

「早川とつき合っちゃえば？かりんってば、あんなに仲イイんだからさ。」

なんて、勝手に進められる強引な話にも、全然気分は盛り上がっていかず。

「えーっ。別に、フツーだよ。だいたい、好きだなんてあたし一言も言っていないし・・・。」

って反論したら、すかさずゆうきが、

「前から聞きたかったんだけどさ、かりんは、ホントは修兄しゅうけいのことが好きなんじゃないの？」

「あ、あたしも怪しいと思ってたんだ。」

「ちよつとなんでそうなるの？ゆうき。なっちゃんも、違うからね！修兄は、そりゃちっちゃい時から、ずっと好きだけど、ただ懂れてるだけだよ。」

つきあうとか、そおゆう好きじゃないんだから。変なこと言わないで！」

ちよつと強く言い過ぎちゃったかな。

なんかみんなしいんとしちやってるんだけど。

反省しかけてたら、

「そんなに強く否定されると、ますます疑いたくなっちゃうよねえ。」

って、全然堪えてなくって。

それどころか、みんなゆうきの意見にうんうんって頷いてたし。なんで、そうなるわけ？私の話、聞いてた？

「よくわかんないんだけど、憧れと好きってどこが違うの？

一緒にいてドキドキしたらさ、それは、好きって事にならないの？」

今度はみかまで、そんなこと言い出す始末。

「だから、さつきも言ったでしょ。

好きは好きだけど、別につき合いたいとかは全然思わないってことだよ。

そういうの憧れって言わない？

みんなだっているでしょ、そういう人。憧れの先輩とかさ。」

ここで負けるわけにはいかないから、一気にまくし立てた。

「ふーん。なあんかごまかされてる気が・・・」

「しない、しない。」

なんとか話をおさめたところで、

「おいっ、望月。ノート貸してくれ！英語オレ今日絶対当たるって早く早く。」

超タイミング悪い、早川！！

みんながニヤニヤしてるのが、見なくてもわかった。

「サンキュ。」

って、アンタは去っていくからいいけど、残された私はどうなるわけ？

「今の見たでしょ。アイツは私をノート貸してくれる便利なヤツくらいにしか思ってたないんだから。」

どっちもその気がないんだから、つき合う以前の問題でしょうが。」

先手をとって、この話題、終わらせようとしたんだけど。
「ばかだねえ、かりんは。そんなこと言ってるうちに、誰かに早川持ってかれちゃうよ！

ああいう部活一筋の男子は、向こうから誘ってくるなんてあり得ないんだから！

ほつといたら、ただの仲イイ友達で、3年間終わっちゃうよ！

これぐらいの年の男の子って、たいして好きじゃない女の子でも、押されたら簡単につきあたりしちゃうもんなんだからね！」

「ちよつとアンタ、一体何者なの？」

横から、みかが突っ込んでたっけ。

「これ、おねえちゃんの受け売りなの。」

でも、説得力あると思わない？」

そう言っつてゆうきは舌をペロツと出した。

『好きじゃない女の子・・・か。』

ちよつとテンション下がった状態で、着替えを終えて、早川を探してみる。

パラソルばかり目立ってカラフルで、こんな中からどうやってみつけたらいいの？

帰りたいような気持ちになってきたトコロに、

「遅い！」

つて、部活の先輩ばりの、気合いの入った声がする。

「また、倒れてんのかと思っただぜ。」

ぶすつとして、怒ってるのかな？

「ごめん。」

キミのこと考えてましたとは言えないし。

「ほら、行くぞ。早くパラソルはいらないと、オレまでぶっ倒れそうだ。」

いつの間にか借りてくれたらしいパラソルを肩にかついで、適当な場所を見つけないで走っていった。

「さすが、サッカー部。」

そんな言葉で片づけるのは申し訳なかったけれど、さりげない優しさで、くすぐったかったから。

「ちよつと、置いてかないでよー。」

大声を出して、照れを隠すのが精一杯だった。

もしかしたら、向こうも照れていたのかもしれない。

一応私はビキニだったし、なあって、それは自意識過剰かな。

大急ぎで用意したバッグの中に、ビニールシートが入ってて助かった。

焼けるように熱い砂の上に、そのままなんてとてもじゃないけど座れない。

少しは役に立ててよかったと、ほっとする私の隣に早川が腰を下ろした。

「あつちいなあ。」

眩しそうに目を細めてるけど、嬉しそうな顔してる。

ホントに自分の肌が、日に焼かれてるって実感できるほどの日差しだというのに。

「望月、日焼け止めちゃんと塗っとけよ。」

お前普段外出てねえんだから、多分大変なことになんぞ。」

「あ、そっか。そうそう、日焼け止めだよ。」

塗らなきゃいけないのはわかってる、わかってるんだけど・・・

どうやって塗ったらいいの？背中なんて自分で塗ったことないけど、届くのかな。

まさか早川には頼めないし、自分でやるしかないよね。

とりあえずの日除けに、頭からバスタオルをかぶって、サウナ状態の私の耳に

「修く〜ん。」

つて、鼻にかかるような甘い声が聞こえてきて。

『ま、まさか、だよ。』

せつせと日焼け止めを塗る早川の陰に隠れて、バスタオルをそっと持ち上げてのぞき見る。

変な汗がじわじわ出てくるのを感じながら、声の主を確認した。

「待ってよ、修君。歩くの早いつてば、ねえ。」

ホルターネックの白のビキニを着て、Ｔシャツ姿のカレの腕に絡み

ついてる、スレンダーなカノジヨ。

華奢な身体に不釣り合いなくらいの大きな胸が揺れている。

「早く戻らないと、オレが文句言われるんですよ。かき氷溶けちゃったらマズイっしょ。」

胸にかき氷を抱えて、申し訳なさそうに言い訳しながら、カレがカノジヨを振り返って・・・。

「修兄・・・。」

早川が側にいるのも忘れて、声に出していた。

「え、何？知り合い？」

幸い私がどこを見て、そう言ったのか、カレには分からなかったみたいで。

視線をさまよわせてるうちに、二人を見つけたのか、

「うおっ。すげえ。見てみるよ。」

やっぱり白ってのは、自分の体に自信がある人だけが、着るべきだな。」

自分で言って自分でうんうんと頷いている。

何よ。水着の女の子が見たいなら、男友達と来ればいいでしょ！

興奮しちやって、バツカみたい。

結局男はみんな、ああいう女に弱いつてことなの？

こんなところで会うなんて・・・。

修兄は、あの人のことが好きなんだ。

あんな人・・・大人っぽくて、スタイルよくって、きれいなあの人。嬉しそうな顔して、笑ってたなあ。

結構うまくやってるんじゃない。

そんなこと全然知りたくなかったのに。

そういえば、

「レイナ」って、名前を覚えてもらった時も、そう思った。

「おい、望月？大丈夫・・・か？」

バスタオルを引っ張られて、眩しさに我に返った。

「ん？何でもない、何でもない。」

「なんだよ、また気分悪いのかと思った。」

「だあいじょうぶっ！」

それより、よそのお姉さんジロジロ見るのやめてよね。

恥ずかしいから。」

ごまかそうとして話をすり替えると、

「オマエだって、よそのお兄さんジロジロ見てんじゃん。」

ううゝ、バレてるよ。

「アンタと一緒にしないでよね。」

ちよっと知ってる人に似てただけです。」

似てるどころか本人なんだけど、とてもじゃないけど言えないし。

「あ、そう。んじゃ、オレなんか食い物買ってくるから。望月、何食う？」

「えっと、私は・・・焼きそば！」

「OK！焼きそば大盛りね。」

「大盛りなんて言ってない！」

「いいからいいから、無理すんなって。」

言いたいことだけ言っ、さっさと走っていった。

「ありがと。」

ついさっきのイヤな気持ちを一気に吹き飛ばしてくれる、不思議なヤツ。

一人残された私は、また日焼け止め片手に悪戦苦闘を始めた。

どうしても背中中の真ん中には手が届かない。

「手伝いましょうか、お嬢さん？」

パラソルの陰になって首から下が見えるだけだったけど、

差し出された手には、見覚えがあった。

「修兄・・・。」

「オス。何やってんの？こんなトコで。ナンパされに来たのか？」

冗談にしてもヒドイ。

「え？あのね、あの、クラスの友達と一緒に来たんだけど、今ちょっと、買い物に・・・」

なんで？

まさかさつき、修兄、アタシに気づいてたの？

「ふーん。かりんのクラスの友達って、男なんだ。」

ニヤニヤしながら、目線が早川の荷物を捉えてるのがわかった。

「う、うん。男の子もいるよ。みんなで来たから。」

修兄だってそうなんですよ。アタシ見ちゃったんだから。

よかったねえ、レイナさん一緒でさ。ホントきれいな人だよねえ。

修兄ってば、鼻の下のばしちゃってさ。」

話を修兄の方に持つてくしか、逃げ道はない。

からかうなって怒られるかと思っただのに、

「だろ、だろ？ウソじゃなかっただろ？

やっぱレイナさんは、ガキのかりんから見てもキレイなんだなあ。

そうかそうか・・・。」

まるで自分の事みたいに、威張って言う修兄にかなりムカついて、

「はいはい、よかったね。愛しのレイナさんが待ってるよ。早く行きなよ！」

ホントはあんな人と一緒にいて欲しくないけど、口が勝手に動いてしまうのだ。

あ、早川が帰って来ちゃったらどうしよう・・・。

急に思い出して、遠くに見える焼きそばの列に一瞬目をやった。

どうやらしばらくは大丈夫みたい。

「ふうん。オレのこと見られたらマズイってワケ。それって、何かムカつくんだけど。」

いつの間にかパラソルの中に修兄がいた。

至近距離で囁かれた低い声に、心臓が跳ね上がる。

な、に？

いつもの修兄じゃないみたい。

コワイ、けど後には引けなくて、

「修兄には関係ないでしょ。」

って、言ったら、

「関係ないんだったら、そう言えばいいじゃん。紹介してくれよ、かりんのカ・レ・シ。」

なんて意地悪なんだろう。

しかも、困ってる私を見て、ほくそ笑んでるし。

「ダメだよ！ダメダメ！っていかカレシじゃないもん。」

あのね、これには色々ワケがあってね、ほら、明日の晩ちゃんと報告するから。

ね？もうお願いだからあっち行つてて！」

また言い負かされてしまった。

というか、自分から白旗をあげてしまった。

いつだって修兄にはかなわない。

どんなに背伸びして、生意気な口きいても、余裕でかわされてしまう。

「そんなに必死にならなくて、もう退散するよ。」

私のおでこを指で弾くと、すつと立ち上がって、振り返りもしないで戻っていった。

心臓が早鐘のようで、頭がくらくらして、気がついたら泣きそうだった。

理由はよくわからない。

修兄がレイナさんのトコロへ行ってしまったから？

早川とのこと、誤解されたから？

それとも、さっきの修兄が、知らない男の人みたいだったから？
悔しいけど、修兄のせいなのは間違いない・・・。

第六話：ピミョーな四角形

とにかく夢中で焼きそばをほおばる私に、

「そんなに腹減ってたのか。」

と、早川は呆れてたけど、今は何も喋りたくなかったから。

黙々と食べてれば追及されずにすむでしょ。

「もう昼飯の時間だもんなあ。オレも超腹減っちゃって。」

結局、大盛り食べてるのは自分じゃないの。

「育ち盛りだもんねえ。」

思わず言葉を返してしまう。

「望月も、もつと食わねえと、成長するべきところもなくなるぞ。」

って、今、どこ見て言ってるの？

ああ、もう、いやらしい！

おっと、感情的になっちゃダメ、冷静に反論しないと。

「何でも大きければイイってもんでもないでしょうが。」

うーん、何となく自分で言ってる負け惜しみっぽいな。

「大きいに越したことはないと思うけど。」

あ、今の顔、今絶対レイナさんと比べたね！なんてやなやつ。

怒りの余り固まったら、

「ま、世間一般の男はそうだろう？」

オレはそんなのどうだってイイけどね。」

だって。

何？今のセリフは。

もしかして慰めてくれてるの？

っていうか慰められるほどヒドイのかな、アタシのプロポーション・

・・・

逆にいつそう落ち込んじゃいそう。

小さい頃から修兄しゅうけいにかかわれてた。

「かりんは手も足も体もみいんな細くて、モヤシみたいだな。夏だ

つてのに、真っ白いしさあ。」

自分の黒く焼けたたくましい腕を私の横に並べて、スゴイだろって、よく自慢してたな。

「いいもん、どうせモヤシだから。」

拗ねてパラソルを飛び出すと、

「さあ、今日は泳ぐぞ！」

せっかく海まで来たんだもんね。楽しまなくっちゃ。」

「よし、行くか。」

疲れるまで泳ぎまくって、死んだように眠って、

そしたら、今日のこのイヤな気持ち忘れられるんじゃないかって、胸の中でグルグルどす黒い渦を巻いている、

自分でもよくわからない、持て余してしまっている感情。

早川には悪いけど、とことんつき合ってもらうからね。

頭の中空っぽになるまで、泳ぎまくってやるんだ！

なんて、付き合ってもらう相手が悪すぎた。

「ねえ、そろそろ上がりたいんだけど。」

「ええ〜っ。もうバテたのか？」

「だってもう体がふやけるよ〜。」

サッカー部の底なしの体力に、毎日家と学校の往復しかしてない私が叶うわけがない。

いい加減にしとかなないと、ホントに沈んでしまいそうだから、

「何か食べたいなあ。お腹空いた。」

今度は別の方法で攻めてみる。

「おう。オレも腹減ったな、そう言えば。」

やった！ノってきた！

「泳ぐのってすごくカロリー消費するって聞いたことあるけど、本当なんだねえ。」

ちよっと白々しかったかな？でも早川には効果あったみたい。

「どうりで腹減るわけだよな。んじゃ、休憩しよっか。」

「うん！」

よかったあ！やっと、やっと陸に上げれるよ。

こんなやり取りを何度か繰り返し、私の体力はもう限界だった。

「もうムリ、お一人でどうぞ。」

「なんだよ、だらしねえな！」

「だってえ、もう死んじやうよ。」

「じゃあねえな。じゃ、あのブイまでラスト1本で帰ってくるから。」

「

部活じゃないんだから、ラスト1本って・・・。

心の中でツツコミをいれるのが精一杯。

レジャーシートにうつぶせに倒れ込み、しばらく動けそうにない。

どれくらいそのままの体勢でいただろう。

じりじりと照りつける日差しがふいに遮られ、背中にふわりと暖かい感触。

バスタオルかけてくれたんだ。

「ありがと。」

「どういたしまして。」

御礼を言おうと振り返った私の頬が、思わず引きつる。

だってそこに腕組みして立っていたのは、早川ではなく修兄だったんだもの。

「お前カラダ固いからなあ。

背中まで、手届かなかっただろ？

ムラに焼けると汚いぞ。」

面白そうに聞いてくるから、こっちもムキになって、

「そんなことないもん。」

「はいはい。」

あ、もしかして、彼氏に塗ってもらったとか？

やるねえ、かりん。」

もう、修兄のいい遊び道具と化していく私。

返事するのも馬鹿馬鹿しい。

こうなったら誰にもとめられないのは、長い付き合いでわかった。

修兄の好きなようにいじられて、からかわれても、本人の気が済むまで、ひたすら耐えるしかないのだ。

正直私は慣れっこだけど、今回はいつもと状況が違う。もうすぐブイまで行った早川がここへ戻ってくるのだ。

この二人を会わせるのは、修兄に新しいオモチャを与えるようなもので、

それだけは避けたい。

「修兄、レイナさん待ってるんじゃないの？」

行かなくていいの？」

一番弱いところを突いてやると、

「おっと、そうだった。」

俺らもう帰るんだけど、乗せてってやったらって、レイナさんが。

優しいよなあ。」

おいおい、またおのろけ聞かそうって言うの？

「かりん、ラクだぞ、車は。」

家の前まで送ってやるぞお。

どうする、どうする？」

畳みかけるように囁いてくる修兄の顔。

ううっ、私が即座に頷けないことを見抜いて、愉しんでる顔だ。

だって、早川だけ置いて帰るわけにはいかないし、

当然二人一緒に乗っけてもらうってことでしょ？

そんなの絶対やだよお。

この拷問がウチに着くまでずーっと続くなんて・・・。

しかも、レイナさんも一緒なんて、二重の苦しみだね。

断ろう、どんなに疲れ果てていても、

例え座れなかったとしても、電車に揺られて帰った方がマシだ。

「修兄、ごめん。やっぱりあたし・・・、」

「おい、望月？」

あーあ、帰って来ちゃった。

しかも最悪のタイミング。

「おお、ちょうどよかった。」

修兄が待ってましたといわんばかりの勢いで、早川の肩をグッと引き寄せた瞬間、

私は心の中で、終わったと思った。

あの嬉しそうな顔。

きつともう逃げられない・・・。

早川は何も知らないから、修兄に上手く丸め込まれて、簡単に頷いちゃうに決まってるんだ。

この後に長くてしつこい尋問が、待ち受けているとは、夢にも思っていないんだろうから。

第七話：二人は恋人？

もうまばらにしか車の停まってる駐車場に、丸っこくてかわいい
シヤンパンオレンジの軽自動車。

きつとレイナさんのだろう。

修兄はバイクしか持っていないはずだし。

開けっぱなしのトランク越しに二人が笑って話してるのが見える。

Tシャツに短パン姿の修兄は、相変わらず背が高くがっしりとして
いて、

日に焼けないよう、長袖のパーカーを羽織ってホットパンツをはい
たレイナさんは、小さくて華奢で。

年齢はレイナさんのほうが1つ上だけど、大人になるにつれて、そ
ういうのはあまり関係なくなるもんだって、

私にもなんとなくわかる。

客観的に見て、二人はとてもお似合いだった。

慣れた手つきで当然のように運転席のドアを開け、エンジンをかけ
る修兄。

知りたくもない二人の日常が、目の前で繰り広げられていくことに、
自分の心が着いていけてない。

一緒に来ていた同じサークルの人たちは、一足先に帰ってしまった
らしく。

ただそれだけのことなのに、二人はもう公認なのだと言われて
いるようで、

車へと向かう私の足はいつそう重かった。

私たちが送ってもらうせいで、誰かが乗れなくなったりするんじや
ないかと、遠慮するフリをして、

修兄の申し出を辞退しようと頑張ってみたりもしけど。

何台もの車に分乗してきていたらしくて、全然そんな心配はいらな
かったみたい。

そっだよね、高校生じゃないんだし。

少し先を歩く早川が急に振り返って、

「お前、寝たふりしてろよ。」

何か企んでいるような、嬉しそうな顔で親指を立てている。

どういう意味なんだろうか？

もしかしたら、私がこの状況を快く思っていないことに、気付いてるのかな？

頑張ってフツーにしているつもりなのに、顔に出ちゃってるのかも。そう思うと、修兄の顔を見てちゃんと話せる自信がなくなってきた、思わず足が止まってしまった。

不思議そうな顔した早川が、白い歯を見せてニツと笑うと、

「ちゃんと説明すれば大丈夫だって。誤解なんだから。」

と、また意味不明な発言を繰り返す。

私が歩きだすまで、立ち止まって待っていてくれるその優しさは嬉しかったけれど、

理由がわからないから、なんかちょっとコワイっていうか……。そのままその場で考え込みそうになったけど、そんな時間を与えてはもらえず。

運転席の窓が開いたと思ったら、私たちは修兄に大声で呼ばれた。

「かりんーっ！置いてくぞ！」

自分から誘ったくせに！

いつそ置いて行ってくれたらどんなにいいか。

仕方がないから急ぐフリをしながら、この期に及んで私はまだそんなことを思っていた。

待っててくれた早川の背中にようやく追いつくと、

「俺が海行こうって言ったから……。俺のせいと言えば俺のせいだし。」

まだボソボソとすまなそうにつぶやいている。

そっだ、そっだよ！

もとはと言えばアンタのせいだよ。

その事実には、言われるまで気づかなかった私は、はっとして睨むような視線を送ると、

「お前、ひよつとして、今気づいたのか？」

まだそうだなんて言ってもいけないのに、おかしくてたまらないというように、顔を背けて笑い出す。

「謝るか笑うかどっちかにしてよね！先行くよ！」

あんまり腹が立つから、早足から小走りにスピードをあげるけど、すぐに追いつかれて。

「100年早いっつーの。」

余裕の笑みを浮かべると、私を置き去りにして駆けていく。

「ああっ、もう、いつもこいつも！」

やり場のない怒りがふつふつと湧き上がってくるけど、この中で一番立ち場が弱い私に、できることは何もない。

ささやかな抵抗を見せたりしようものなら、100倍くらいで還ってきてそうだし。

確かに早川の言うとおり、私にできるのは、寝たふりくらいかもしれないな・・・。

なんだか悲しくなってきた、肩を落として車にたどり着くと、黙ってトランクに荷物を積んだ。

もう私以外は車に乗り込んでいて、必然的に運転席の後ろに座ることになる。

運転席には修兄、助手席はもちろんレイナさんで、後部座席には早川と私が並んだ。

第八話：癒えない傷

「んじゃ、帰りますか。」

エアコンが効いた車内は快適で、やっぱり乗せてもらってよかったな、なんて、

のんきにくつろいでいたのもつかの間だった。

「さて、じゃあまず自己紹介してもらおうか？」

俄然張り切りだす修兄。

「誰から行く？」

ミラー越しに探るような目線を送る修兄と目が合う。

やばい！

来る、絶対来る！

うつむいて固まっている私の隣で、

「はいはい！俺行きまあす！」

早川が勢いよく立ちあがり、

「ゴッソ！」

とものすごい音とともに、頭を押さえてシートに沈んだ。

「・・・つてえ。」

「大丈夫？」

レイナさんが心配そうに後ろの座席を覗き込む。

「は、い・・・。」

全然大丈夫そうじゃない返事に、

『子供じゃあるまいし、そんなに張り切るからだよ・・・。』

半分呆れたように、

「大丈夫？」

今度は私が聞いたら、

「誰のせいだと思ってんだよ、くっそー。」

って、恨めしそうに小声で言われて。

そう言われてやっとわかった。

私の代わりにトップバッター引き受けようとしてくれたんだってことが。

やっぱり私が困ってるってことに、気が付いているんだ。理由は何も聞かないけど、助けてくれようとしたんだ。

おかげで、なんだか急に心強くなって、元気が出てくる私は単純なのかもしれないけど。

ホントに嬉しかったから、

「はい！じゃあ、代わりに望月かりん、行きまーす。」

気づいたら勝手に口が動いていて。

「イエーイ！」

狭い車内に思いつきり拍手が響いて始まった自己紹介タイム。

「えっと、望月かりん、高1です。」

部活は特に入ってません。

修兄とは家が隣で・・・、

そこまで言い掛けると、

「えーっ！かりんちゃんって高1なのぉ？

高1って16歳だよね？

16だつて、修くん！

・・・いいなあ、若いなあ。」

しみじみと言いながらレイナさんがほっぺをぷにぷにと突いてくる。

「てことは、彼も16？

いいなあ。

すっごい焼けてるけど、なんかやってるの？」

すでに順番なんて何の意味もなくなっていた。

私たちはレイナさんが思いつくまま、いろんなことを質問された。

逆に修兄は予想外におとなしくて不気味なくらいで。

戸惑いながらも、

「はい、サッカー部なんで・・・。」

と受け答える早川。

「へえ、サッカーかぁ。あれってカッコイイけど大変そうだよな。」

夏休みも練習あるんでしょ？」

「はい。」

「暑いのにエライねえ。」

「はい。」

「早川くん、だよね？」

「はい。」

「下の名前なんていうの？」

「孝です。」

「孝くんかあ。」

今日は部活休みなんだ？」

「はい。」

「じゃ、悪かったかな、お邪魔しちゃって。」

「はい。」

「「え？」」

ひたすら頷き続けていた早川がここで初めてフリーズする。

隣で二人のやり取りを見ていた私も。

「練習忙しいとなかなかデートできないでしょ？」

せつかくのお休みだもん。やっぱ二人つきりでいたいと思うよね。」

顔を見合せて固まる私たちに、わかるわかるって言いたげに、レイ

ナさんはうんうんと一人うなずいている。

「レイナさん。」

修兄がやたらハイテンションなレイナさんを制止しようと目配せすると、本人はキョトンとした顔で、

「なんで？修くんだってそう思うでしょ？そう言ってたじゃない。」
全く動じない。

「いや、だから、そうじゃなくて。」

「えー？だって付き合ってたらし思うのがフツーだよ。」

彼が忙しくて会えないなんて、かわいそうだよ。

まだ高校生だよ？

久々のデートなんだったら、その時間、大事にしなくちゃ……。」

まるで自分のことみたいに熱くなってるレイナさんの様子が少し気になった。

感情移入しすぎてか、泣きそうになっているように見えたから。しばらく間があってから、気持ちを切り替えるように、溜息を一つ吐いた後、

「なんて、余計な御世話か・・・。」

そう言って小さく舌をペロツと出して、自嘲気味に笑った顔が切なくて。

私はその場で否定の言葉を口に出すことができず、それは早川も同じみたいだった。

修兄は一度レイナさんの方を見ただけで、何も言わずにカーステに手を伸ばした。

第九話：切ない恋、淡い恋

私の、というか早川の自己紹介の途中から、車の中の空気がなんだか気まずい。

それは誰も迂闊に口を開けないような、重苦しい雰囲気です。しばらく続いた沈黙を破ったのは、レイナさんで。

「佐伯レイナです。えっと、一応20歳になりました、大学二回生です。よろしく。」

と、申し訳なさそうに笑って、軽く頭を下げたので、

「「よろしくお願いします。」」

私たちは、二人揃って頭を下げた。

「ほら、修くんも、」

レイナさんが運転する修兄しゅうけいの腕を肘でつついて催促すると、信号で止まったのを見計らって、やっと口を開いた。

「新谷修一です。19歳。大学はレイナさんと同じ。学部は経済学部。」

ぶっくらぼつに言うと、信号が青に変わり、また運転に集中する。何がいけなかったのか、ウソみたいにむっつりと口をつぐんでいる修兄と、

流れる景色に目をやるレイナさんの間のビミョーな距離感。

小声で早川が、

「おい、俺ら、降りたほうがよくねえ？」

って聞いてくるけど、実際問題そんなの無理だし。

私だってできることならこのいたたまれない状況から脱出したいけど、

それ以上に、ぼんやりと窓の外を見ているレイナさんの横顔から目が離せなかった。

どことなく寂しそうで、『憂いを帯びている。』と言えいいのかな。

さつきまでの楽しそうな様子とはまるで別人のようで。

「孝くん、うちのへん？」

いきなり修兄に話しかけられて、早川の肩がビクつとする。

「あ、俺、駅前に自転車停めてるんで、そこで降ろしてもらえますか？」

「了解。」

その会話を聞いてようやく、私も自分の自転車のことを思い出した。

「あの、修兄、あたしも！」

「オッケー。」

結局駅に着くまでの間も、着いてからも、修兄は一度も後ろを振り返らなかった。

「ありがとうございました。」

駅で降ろしてもらって、丁寧に頭を下げている早川を横目に見ながら、

「あの、・・・気をつけて。」

としか言えない私。

あんな張り詰めた空気の車内に残った二人が気になって、お礼どころじゃなくて。

修兄からの質問攻めにあうことを覚悟して、送ってもらうことにしたわけだけど、

実際にはそんなこと気にしていた自分が、馬鹿みたいに思えるほど、修兄は私に関心ないんだってわかって。

しつこく責められずにすんだのは、もちろんラッキーだったと思ってるけど、

そんなことはどうでもいいことだと、そう言われているようで、私にとっては複雑だった。

修兄には、もっと他に気になることがあるんだってわかるから、余計に複雑・・・。

私たちはレイナさんとだけ挨拶をかわして、二人と別れた。

「修一さん、なんか機嫌悪かったよなあ。」

自転車置き場に向かって歩きながら、早川は私に同意を求めた。

「そうだね。」

頷きながら私は、その原因がなんとなくだけわかる気がして、修兄がかわいそうに思えた。

レイナさんはきっと、仕事で忙しくて会えなくて別れてしまった彼を、

部活で忙しい早川に重ねてしまったんだと思う。

だからあんなふうに、気持ちが悪くなったのだ。

それはたぶん仕方のないことで、誰が悪いわけでもないのだけれど。「うまくいってないのかな？あの人二人。」

ちよつとズレた質問をしてくる早川に、二人の事情を話すかどうか一瞬迷って、

「さあ、・・・そもそも付き合ってるのかな？」

気づいたら自分の中にある疑問を、そのまま口に出してしまっていた。

「え？違うのか？」

「知らない。」

慌てて否定したら、

「なんでお前まで不機嫌なわけ？」

わけがわからないと、困惑気味な早川を申し訳ないと思いつつも、無理して笑える心境でもなく。

別に私には関係ないことだって、どうにもできないことだってわかってるけど、

胸の中に、切ないような、ほろ苦いような気持ちがいっぱいに広がって、苦しくて。

恋って楽しいことばかりだと思っていたわけじゃないけど、現実を目の前で見てしまうと、戸惑ってしまう。

「あーあ、腹減ったなあ！」

突然、わざとらしいほどの大声をあげたと思ったら、早川が自転車のハンドルにがつくりとうなだれていて。

まるでエネルギー切れって感じ。

あんなにたくさん食べてたのに、もうお腹すいたなんて、

「どんだけ食べたなら満足なわけ？」

別に厭味でもなんでもなく、ただ純粹に興味があつて。

だってあんなにいっぱいお昼ご飯食べて、合間に二回もカップラーメン食べてたし、

私には考えられなくて、素直にそう聞くと、

「うーん、とりあえずコメが食いてえー!!！」

「はあ？」

空向いて大声で吠えた割には、わけのわからない答えに思わず吹き出してしまった。

「ふふつ、ちよつと何それ？」

御飯だけ食べてどーすんのよ？

変なのー。」

お腹を抱えて笑つてると、

「なんだよ、お前、コメを馬鹿にすんのかー？」

つて怒るから、

「違うよ。馬鹿にしてるのは、コメじゃなくて、」

涙を拭きながら答える私をジロリと睨みつけると、

「帰るぞ！帰って飯食うぞ！」

背中を向けて自転車をこぎ始める。

「ちよつと待つてよー。」

「追いつけるもんなら追いついてみる！」

イタズラっ子みたいな顔して振り返ると、ぐんぐんスピードをあげていく。

今怒ってたくせに、もう忘れたみたいに無邪気に笑ってる。

羨ましいくらい眩しい笑顔に、一瞬クラッときた。

その間にも、どんどん遠ざかる後ろ姿に、

「あのー、私一応女の子なんですけど。」

呟いてみても、無駄なのはわかってるけど。

だってあの顔は、絶対手加減なんてしてくれない顔だもの。

仕方ない。

なんかすっかり向こうのペースだけど、付き合ってやることにしよう。

もういい加減疲れ果ててる体を引きずるように自転車にまたがって、ひたすらにペダルをこぎ続ける。

せっかくひいていた汗が、また肌を湿らせていくのがわかるけど、風をきつてこいでいる間だけは、それも心地よく感じられた。

いつの間にか、さっきまでの重い気持ちもどこかに吹き飛ばされてしまったようで、

体を動かすことって、単純に気持ちいいなあって思う。

ホント、高校生にもなって競争なんて子供みたいだけど、ちょっとだけ早川に感謝だな。

目の前にあったはずのその背中が、はるか遠くに小さく見えていて、信号1つ差を開けられて、

どうにも追いつけそうにないけど。

それでもムキになって追いかけていると、坂の上で止まっている自転車が見えた。

「はい、俺の勝ちー！」

Vサインする早川は涼しげで、余裕たっぷりなのがム力つくくらい。こっちはこんなに汗だくで、息も切れ切れ、言い返すこともできないというのに。

やっぱり運動不足なのかなあ？

呼吸を整えるだけで精いっぱいなのに、

「家、どっち？」

ハンドルに肘をついた姿勢で、早川が聞いた。

声も出せずに指で示すと、

「こっから下りだから、大丈夫だろ？先行って。」

なんだか知らないけど、考えるのも面倒で、言われるままに前へ体を動かした。

後ろからゆっくりと着いてきているのが、気配でわかる。

不思議そうに振り返る私に、

「送るから。夏は変なの多いっていうし。」

短く言って、周りの景色へと視線をそらした。

照れてるんだ。

だからかな、こっちまで恥ずかしくなった。

「ありがと。」

聞こえるか聞こえないかの声で呟いて、逃げるように坂を下る。

赤くなつた頬にあたる風が生あたたかくて、火照りがちつとも冷めていかないのがもどかしい。

顔を見られたくなくて、ついついペースが上がってしまうけど、

送ってくれるという相手を、引き離せるはずもなく。

私の実力的にいつでも無理だしね。

お互い何も話さないまま、家の前までたどり着いてしまった。

「じゃあ。」

「うん、気をつけてね。」

「おう。」

気まずいわじゃないけど、どうしたらいいかわからず、そんな短い会話だけで別れてしまった。

女の子扱いされるのに慣れていない、というか、初めてかもしれない貴重な経験だった。

いろんなことがありすぎて、正直今日の私の心臓は、かなりお疲れだと思う。

いろんな意味で心拍数上がりすぎたもんね。

それでも今日一日を振り返って、楽しかったと言えるのは、早川のおかげかもしれない。

ちよつと強引だったけど、ずいぶん救われた気もするから、よしとしよう。

第十話：悩める乙女

「かりん？起きてるのー？寝ちゃダメよー！」

帰宅してすぐ、シャワーへ直行したまま、いつまでたっても出てこない私を心配して、お母さんが呼ぶ声。

だって家に帰ってきたら、どっと疲れが出たんだもん。

ホントに長い一日だったなあ・・・。

もうちよっとお湯につかってぼーっとしていたい気分。

どれだけゆっくりお風呂につかっても、取れないこの疲労感は一切どこからくるのか？

ぬるめのお湯でも、さすがにこれだけ入っていると体が熱くなってくるようで、

このままじゃ脱水症状おこしちゃいそうだし、仕方ない、あがるとするか。

そういえばお腹すいたしなあ。

お姉ちゃんにバレたらウルサイから、黙って借りたワンピースを脱衣カゴの一番底に隠すと、

飲み物だけ持って、さっさと自分の部屋に戻ろうとリビングを横切る。

「かりん、ケータイ鳴りっぱなしだったわよ。」

「はい。」

お母さんに呼び止められて仕方なく立ち止まり、

バッグの中に入れっ放しになっていたケータイを、

手さぐりで取り出した。

片手で画面を開くと、未読メールが4通、着信履歴が5回も入っていた。

しかもすべて同じ相手から。

「はあゝ。」

思わず大きなため息が出た。

はつきりいつて完全に忘れていた存在。

そういえばもう一人いたんだ、うるさいのが。

この追及をどうやって逃れるか、ある程度作戦を練ってから連絡しないと。

ペタペタとローションで焼けたお肌をケアしながら、

片手で順番にメールを開く。

『あれからどうなった？』

男の子には会えたの？

報告待つてるからね（＾０＾）／

『電話したらお邪魔かと思ってメールにしてるんだけど！？』

こっちには来てなかったよね？

一応探したんだけど、見つからなくて・・・。

『メール読んでないの？』

途中経過でもいいから教えてよっ！

だんだんイラついてるのが手に取るようにわかるなあ・・・。

『一体どこ行っちゃったの？』

騙したのは悪かったと思ってるけどm（――）m

ヒロ君も心配してるから、メール見たらすぐ電話して！

うーん、この感じだともしかしてあっちも連絡着いてないのかも。

オロオロしてる二人が目に見えなくて、私はちよつといい気味だと思っってしまった。

だって、おかげでこっちは大変だったんだもんね。色んな意味で。

電話だとまた長くなりそうだし、どうしようか迷ったんだけど、

やっぱり無事は伝えておいたほうがいいだろうと、メールを打つことにした。

たぶん、そんなんじや許してもらえないだろうな・・・。

きつとすぐ電話かかってくるだろうとは思っただけど、もしかしたら逃れられるかもしれないし。

希望的観測だなあと我ながら思いながら、当たり障りのない文章を考える。

向こうも謝ってるってことは非を認めてるわけだし、ちょっと怒ってるフリしちゃうかな。

『男の子って早川のことでしょう？』

なんで内緒でそういうことするの！わけわかんないよ、もう。もう絶対あんなことしないでよ！

ちゃんと家帰ってきたから、心配しないで大丈夫だよ。』

思い切って送信ボタンを押す。

案の定、二分もたたないうちに鳴り出す着信音。

「早っ！」

ベッドの上で震えだすケータイに思わず後ずさる。

ことのいきさつをうまく話せる自信がないだけでなく、今自分が何を言い出すかわからない不安もあって。

「はい。」

恐る恐る出ると、

「あーっ、かりんー！」

なんで電話してくんないのお？

心配してたんだよ、ずっーと！」

「あの、えつと、・・・ごめん。」

なんで私が謝ってるの？逆でしょ？

「いいけどさっ、で、早川には会えたんでしょ？ねえねえ？」

さっそく本題に入るみか。

待ちきれなくてうずうずしてるのが声だけでもわかるくらい。

「うん。会ったよ。」

「それで？」

二人も後からこっちのプール来た？」

「ううん。」

「だよね、だよね？」

ヒロ君と探したけどいなかったもん。絶対二人どっか行っと思ったてたんだ！」

みかの質問に答えながら、私も聞きたいことがあったことを思い出

して、

「ねえ、そもそもなんで今日早川が来たわけ？」
今度はみかが答える番だ。

「え？ああ、ヒロ君に頼んだの。」

『誰か男の子連れてきて』って。そしたら、」

「そしたら？」

「あの二人、中学からの知り合いで、仲いいみたいだったから、私も、知らない人より知ってる人の方がよかったし、それで・・・、

」

「ふーん。」

「ホントだよ！偶然っていうか、あの、ちょうどお休みだつていうし、

かりんとなら、気も使わなくてすむからラクなんじゃないかって、

ヒロ君が・・・。」

最後にはヒロ君のせいにしちゃって。

かわいそうなヒロ君。

確かにみかのおかげで、今日は決して退屈ではなかったし、

いっぱい刺激を与えてもらった気はするけど。

そんなこと本人に言ったら、

「でしよでしょ？」

なんてすぐ図に乗りそうだから絶対言わない。

「そんなに怒らなくなつていいじゃん。楽しかったんでしょ？」

どこ行つたの？どこ行つてたの？

ずっとメール返ってこなかったくらいだもん、楽しかったんだろう

なあ・・・。」

勝手に電話の向こうで妄想し始めているみかに、どこまで話したらいいものか。

どうせ早川の方は、ヒロ君にいろいろ聴取されてるんだろうし。

（まあ、ヒロ君の場合、させられてると言つた方が正確かもしれないけどね。）

ウソつくと後々ややこしいから、余計なことは言わないようにして、聞かれたことにだけ答えればいいか。

「あの、向こうが海に行きたいって言うからさ、海に行ってきた。」

「えーっ！遠いのに、海まで行っただんだ？すごいじゃない。」

いいなあ、ロマンチックだよねえ。」

なんかさつきから良いように想像しすぎてる気がするんだけど。

「で、もちろんこの前買った水着持ってたんでしょ？」

「まあね。」

「あれ、フリルがついてて超カワイイんだよねえ。」

かりん色白いからすごく似合ってたし。」

絶対早川、クラっときてたはず。」

「それはないと思う。」

そこは間髪入れずに否定した。

私の頭の中には白い水着姿のレイナさんが浮かんだから。

「私なんかよりキレイな人、いっぱいいたから。」

思い出したら無性に腹が立ってきて、言い方がキツくなってしまった。

変に思われなかったかなと心配していると、

「向こうはどうだった？私服とか、カッコよかった？」

そんなのお構いなしに聞いてくるみかにほっとしながら、

そっういえばどんなカッコしてたっけ？って考えてたら、

家の前で別れた時のぎこちない自分達が浮かんで、ほっぺがまた熱くなって。

顔見えなくてよかった、危うく突っ込まれるとこだった。

それでも、なぜか手のひらで自分を扇ぎながら話す。

「まあまあだったよ。まあ元がそこそいいんだし。」

今のところうまくかわせているなと安心して、

すっかりカッコイイと認めていることにも気付かず。

「ふん。」

含みのあるみかの声が、なんか不気味。

「今まで一緒だったの？」

「ううん、1時間くらい前に帰ったと思う。」

帰ってからシャワー浴びて、しばらくぼーっとしてたから。」

「デートの余韻に浸ってたとか？」

「違います！疲れただけです！」

あの体育会系に付き合わされた私の身にもなつてよ。

マジで海に沈むかと思ったんだから。」

「それってさ、よっぽど楽しかったってことだよ？ね？」

みかが笑いをこらえながら何度も確認するように聞く。

「うん、まあ、・・・フツーに楽しかったよ。」

「ホント？よかった〜！」

頑張って作戦立てた甲斐があったよ〜。

そっか、そっかぁ。うまくいったんだ〜。」

はしゃいでいるみかに釘を刺すように、

「別に何もうまくはいってないと思うけど？」

と一応言っておいたけど、全然聞こえてないみたい。

「まあ、お疲れみたいだから、今日はこの辺で許してあげるけど。」

電話じゃイマイチわかんないし、会って話そうよ、ね。

みんなにはあたしからメールしとくから。」

「みんなって、ちよつと、みか？」

って切れてるし・・・。

うらやましい性格してるよねえ、相変わらず。

マイペースというか、自分勝手というか。

言いたいことだけ言っ、聞きたいことだけ聞いて、さっさと切っちゃうなんて。

私だって、聞いてほしいことあったんだけどなあ。

持て余して整理のつかない感情も、聞いてもらっただけでラクになれたりするものでしょ？

そもそも半分以上みかの責任だと思っただけど。

まんまと策略にハマったなんて、認めるつもりはないけど、

自分の気持ちが大きく動いたことを自覚しないわけにはいかなかった。

それは早川に対してだけでなく、修兄に対しても。

ただでさえこういうの慣れてないのに、一度に二人のことなんて、私の頭じゃ考えられそうにない。

もういっぱいいっぱい、思考回路がショート寸前。

いつもは聞かれたくないことまでしつこく聞くくせに、こんなときだけあっさり引き下がるなんてズルイよ。

こっちは珍しく誰かに話聞いてもらいたい心境だというのに。

ベッドの上で右へ左へゴロゴロ転がりながら、時々すぎるようにケータイを見つめてみる。

いつかかってきてもいいように、夕飯の時も、ケータイをリビングに持っておりて。

ただどんなに待ってもその夜は、みかから電話はかかってこなかった。

第十一話：女の友情

昨夜は結局あんまり眠れなくって。

寝ぼけ眼でリビングへと降りていくと、出勤前のお母さんがいた。

「珍しいわね、かりんが起きてくるなんて。」

ちゃんと朝ごはん食べなさいよ。」

忙しそうにパタパタとスリッパの音をさせ、

目の前を行ったり来たりするお母さん。

「パンでも食べよっかな。」

「冷蔵庫にヨーグルトもあるし。」

食べたらちゃんと片付けといてね。」

「はい。」

と返事はしたものの、テーブルに肘をついたまま、ぼーっとしてしまふ。

「かりん、今日、修ちゃんのと行く日でしょ。」

うわっ。そうだよ、今日って水曜日だったんだ！

今ので一気に目が覚めた。

「冷蔵庫に昨日送ってきたぶどうがあるから、

おすそわけ持ってってほしいの。」

お母さんすぐ忘れちゃうから、かりん覚えといてね。」

「わかった。」

とは言ったものの、

昨日の今日で顔を合わせるのなんかちよつと気が重い。

かといって、行かないのは余計に気まずい気がするし……。

なんとかして逃れられないか、方法を考えている私に、

「じゃ、お母さん行ってくるから。」

かりんも一日中ダラダラしてちゃダメよ。」

「わかってるって！いってらっしゃい。」

「いってきます。」

しんとしたリビングに一人でいると、
やっぱり今日も暇な自分を自覚してしまう。

昨日のことは夢だったんじゃないかと思えるほどだ。
だけど・・・。

両足の甲には恥ずかしいほどくつきりとビーチサンダルの型が残り、
タンクトップから出た肩先を指でそつとなぞると、ピリつとした痛みが走る。

そのどちらもが、全ては現実に起きたことだと訴えているようで。

「はあ。」

起きてから何度ついたかわからない溜息。

私が考えたって仕方無いことなのに、どうしても考えてしまう。

思っていたよりずっと、レイナさんがいい人だったからなのかなあ？
いつのまにか、二人を応援したい気持ちが大きくなって。

いつだって余裕の修兄の、あんな表情見せられちゃったら、
仕方がないよね。

ホント、いっぱいいっぱいってカンジで、

感情を隠そうともしないなんて、意外だった。

私たちは小さい頃からずっと一緒に、兄妹みたいに過ごしてきたから、

修兄のことは大抵のことならわかるつもりでいたんだけど、

・・・違ってた。

それとも、修兄が変わっちゃったのかな？

今までの自分が変わってしまったような恋。

そんな恋を私もいつかする日が来るんだろうか・・・。

今の私には想像もつかなくて、なんかちょっとコワくなって。

そんな思いを振り切るように、

サイドボードの充電器からケータイを外して開いた。

驚いたことに、みかだけでなくゆうきやなっちゃんからも、
メールが来ていた。

夏休みに入ってからというものの、ほとんど音沙汰なしかった二人が

ら！

しかもそのタイトルが、

『おめでとーっ！』とか、

『よかったね』とか、

読まなくても十分想像つくような、ストレートなタイトルで。

みかってば、一体他のみんなに何を吹き込んだんだろ・・・？

全然わかりたくはないけどわかるから、中身を読むのが恐ろしかった。

で、そのみかからのメールは、

『明日みんなで会おうよ！

かりん家行つていい？

ママお仕事でいないでしょ？』
だつて。

ちやつかりしてるよ、ったく。

まあ、中学からの付き合いだし、ウチの事情は把握してるもんね。
すさまじい質問攻めにあうことを覚悟して、

私はOKの返信メールを出すことにした。

こんなくだらないことでも、予定ができたことが嬉しくもあつたし、
久々にみんなに会えるのが、素直に楽しみだった。

聞かれたくないような聞いてほしいような複雑な気持ちに変わりは
ないけど、

友達にだったら、上手く話せるかもしれないし。

いつもはひたすら聞き役に徹してるんだから、たまにはいいよね？

まだ誰にも何も言っていないけれど、約束したというだけで、

少し心が軽くなった気がした。

第十二話：姉妹ゲンカ

夕方、リビングでドラマの再放送を見ていたはずなのに、たたみかけの洗濯物に埋もれて、いつのまにか寝てしまっていた。なんだかまるで主婦のような一日を実感して、ちよつとぞつとする。うたた寝したせいで、体がじつとりと汗ばんで気持ちが悪いので、シャワーを浴びようとバスルームへ向かうと、知らないうちに部活から戻っていたお姉ちゃんがちょうど出てくるところで。

「かりん、今日家庭教師の日でしょー？」

「そーだよ。」

なにか言いたそうにニヤニヤして、私の顔を見ると、

「まあ、昔からあんたは修ちゃんのアンだもんね。」

私にはどこがいいのか、全っ然、わかんないけど。」

昔からお姉ちゃんは、修兄のことを修ちゃんと呼ぶ。

1つ年下なだけだし、お母さんたちがそう呼んでるからだっけって言うけど、

私はなんか気に入らない。

床に置いた体脂肪計に足を乗せ、

「でも、修ちゃんは年上が好みだからなあ・・・。」

また一人でクスクス笑って、とにかく感じ悪い。

無視して側を通り過ぎようとすると、

「この前、私、部活の帰りに見ちゃったんだよねえ。」

含みのある言い回しに、思わず足が止まった。

ここで立ち止まったら向こうの思うツボなのに、

その続きを聞きたい誘惑には勝てなくて。

「近所のファミレスでなんだけど、修ちゃん、彼女と揉めてたみたいでさ、

すっごいキレイな感じの人で、あれも年上だよ絶対。」

その人、泣いてたんだよ！ヒドくない？あれもうダメっぽいよ、絶対。」

ワイドショーのレポーターみたく、嬉しそうに話すお姉ちゃんは、超やな感じだったけど、ウソをついているようには見えなくて。

「それって、いつ・・・、」

言いかけて、自分の言葉にはっとした。

そんなこと聞いたってどうしようもないのに、何を言っているんだろう、私。

黙り込んでうつむく私を、お姉ちゃんが不思議そうな顔で覗き込んでくる。

「ま、そう落ち込むことないって。

修ちゃんだけが男じゃないんだし。

大体かりんは修ちゃんを美化しすぎなんだよねー。

そりゃ、私もちよつと意外だったけどさ。

優しいだけを取り柄だと思ってたのに、公衆の面前で女の子泣かしちゃマズイよね。」

お姉ちゃんって言ったって、たかだか2年早く産まれてきたってだけなのに、

なんでそこまでエラソーになれるの？

私のことだけならまだしも、修兄のことまで、馬鹿にしたみたいなの言い方して。

修兄だって、何も泣かせようと思って泣かせたわけじゃないはずなのに、

それをおもしろおかしく話す無神経さが許せなくて、

「何にも知らないくせに、テキトーなこと言わないで！」
怒りにまかせてバスルームの扉を思いっきり閉めた。

「何よ！バカ！せつかく教えてやったのに！」

ガラス越しに叫んでるお姉ちゃんの声をかき消すように、シャワーの蛇口をひねる。

「冷たっ！！」

もう、何よ！・・・お姉ちゃんのバカっ！」

なんでこんなにイライラするんだろう？

自分でも何に腹が立っているのか、よくわからない。

お姉ちゃんが修兄の悪口言ったから？

彼女って言葉に、レイナさんの顔が浮かんだから？

それもあるけど・・・、

私、今一瞬、喜んできた。

修兄が彼女と、レイナさんとダメになったかもしれないって聞いて、ちよつと嬉しいと思つてしまったんだ。

信じられなかった。

なんで？

レイナさんは会つて話してみたら、とってもいい人だったし、二人がうまくいけばいいなって、さっきまでホントにそう思つてたはずなのに。

自分がこんなにやな子だったなんて、信じられないし信じたくない。自分でもよくわからない自分の気持ちに振り回されて、頭の中はぐちゃぐちゃになっていた。

これって単なるヤキモチ、なのかなあ・・・？

ただ他の人に獲られたくないだけとか？

好きな芸能人に熱愛が発覚したときのファンの気持ちみたいな？

「ホントは修兄のことが好きなんじゃないの？」

いつかゆうきに言われた言葉が頭に浮かんで、

「そういう『好き』じゃないもん・・・。」

自分にいいわけするみたいに呟いた言葉は、出しっぱなしのシャワ

ーの音にかき消されて、

泡と一緒に流れていった。

第十三話：接近

一人でいる間にあれこれ考えすぎて、

時間になってもなかなか修兄の家へ行く気になれなかった。

どんな顔して会ったらいいのかわからなくて。

さりげなくとか、自然にとか、思えば思うほどなくなるタイプだし。

だけど今日行つとかなないと、この先余計に顔合わせづらいことくらい、

私でもわかるから。

勇気を振り絞って玄関のインターホンを押して、

「こんばんは。」

それだけなのに、ビミョーに声が上ずってしまふ。

「おう、開いてるから。」

いつもと変わらない声が聞こえて、少しほっとした。

「おじゃまします。」

修兄しかいないけど、一応玄関で挨拶してから、

いつも通りに脱いだ靴を揃えてキッチンへ向かう。

お母さんに言われていたお裾わけのぶどうをしまおうと、冷蔵庫を開けて、

「修ちゃん彼女と揉めてたみたい・・・。」

さっきのお姉ちゃんの言葉が、ふいに頭をよぎる。

『それっていつの話だろう・・・?』

ぼーっと思いつている間中、開けっぱなしになった冷蔵庫が、

ピーッ、ピーッという警告音を鳴らして、私を現実へと引き戻す。

「聞かなかったことにしよ。」

慌てて冷蔵庫のドアを閉めながら、自分に言い聞かせるように小さな声で。

二階へ続く階段を上がりながら、

『いつもどーり、自然に、自然に……。』

呪文のように心の中で唱える。

ドアの前に立つと、いっそう高まる緊張。

心を落ち着かせようと、ドアノブをグツと握って、深く息を吸い込んで、

ガチャツ。

「え？」

勝手に開いたドアに引っ張られ、グラリと前に倒れていく体。

ゴツン。

「いったあ……。」

「大丈夫か？」

聞かれて見上げたら目の前に、修兄の顔があった。

一体何がどうなってるの？

不思議そうに瞬きする私に、修兄も首を傾げてみせる。

「おまえがなかなか上がってこないからだよ。何やってたんだ？」

半分呆れたような顔して聞かれても……。何やってたんだろ。

そんなに長いこと冷蔵庫の前で考え込んだのかな？私。

修兄が様子見に降りてこようとするくらいだもんね。

拳句の果てにドアノブ掴んだまま固まってた私は、

ドアごと引っ張られてよろめいて。

そのまま顔を思い切り修兄の胸にぶつけてしまったんだと納得した。

ことのいきさつを理解した途端、

自分が修兄の腕の中にスッポリと収まったままだったことに気づいて、

「あの、もう大丈夫だから。」

慌ててもがいてみても、どうにも抜け出せない。

「だから？」

知っててわざと聞いてくるこの性格の悪さ。

しかも、背中にまわった腕の力をどんどん強くしてくるなんて、

どこまで意地が悪いんだろ。

苦しくて息ができなくて、修兄の胸を何度もぐうで叩くけど、それでも許してくれなくて、

もう私の体全部が、修兄に覆われて隠れてしまっている。

抵抗してもどうせかないっこないんだし、暴れたら余計に遊ばれるだけだし。

どうせすぐ飽きるだろうからって、されるがままになっていると、修兄は全然動かないし、何にも言わない。

それどころか、髪に頬をうずめるように、上半身を傾けてくる。

何で？何がどうなってそうなたっちゃんわけ？

いくらなんでもやりすぎだよ。

「どーしちゃったの？あれ、修兄？」

ふざけてるんでしょって、顔見て言いたくて、

体を離そうとするけど、させてくれない。

まるで見られたくないって言っているみたいに、

顔をあげることさえ許してはくれない。

口には出さないけど、

『・・・何かあったの？』

表情もわからない状況の中、何を根拠にそう思うのか、自分でもわからない。

それでも、その手が救いを求めているような気がして、

振りほどくなんてできなくて。

異常な接近状態にドキドキして倒れそうなくらいなのに、

なんでもかな、逃げ出したりする気は起らなかった。

修兄が話したくないなら、聞かないでいようって。

ホントは聞きたいことだらけなのに、聞けなかった。

こういうとき、妙にものわかりいいフリしちゃうつコ、

ホントは自分でもあんまり好きじゃないんだけどな。

第十四話：言いたくないこと

クーラーでよく冷えた部屋の中では、ヒトの温もりは心地よくて。

しばらくこうしててあげてもいいかなって思えるくらい。

頭の中にはどちらのものともつかない鼓動だけが響いて、ふわふわして。

いつのまにか力の抜けた私は、随分長い間そうしていたような・・・。

「おーい、か〜り〜ん。」

名前を呼ばれて始めて、体が自由になると気がついた。

「あれ？」

「寝てんのかと思った。」

実はちょっと気持ちよくてぼーっとしてたなんて言えるわけないし、

そんな自分が恥ずかしくて、慌てて離れると、

「修兄が解放してくれないからでしょ。」

って、いいわけ気味に抗議したら、

「ごめん。」

『え？今なんて？』

そんなにあっさり謝られると、気持ち悪いんですけど。

目をそらして伏せた横顔が、バツ悪そう。

やっぱり、何かあったんだ・・・。

きつと、レイナさんのこと、・・・だよな。

探るように見つめる私の視線に気づいた修兄は、

「やっぱりお子ちゃまは抱き心地イマイチだなあ」。

顔がついてなきやどっちが前だかわかんねえぞ。」

「ちょ、・・・それどういう意味？」

「さ、勉強、勉強。」

わざとらしく言うてはぐらかすと、床に胡座をかい

て教科書をパラパラめくり始めた。

仕方ないから私も、一応ノートを広げるたものの、

どう考えても今のは納得いかない。

だってこっちは心臓飛び出るくらい緊張したんだよ！

それなのに、あんな言い方って！

だいたい離してくれなかったの修兄の方じゃない！

このまま言われっぱなしじゃ悔しいから、抗議の意味をこめて、

部屋の真ん中に置かれた丸テーブルに、

分厚い参考書をドスンと大きな音を立てて置いた。

ジロリと横目で睨みつける私のささやかな反撃なんて気にも留めず、

「で？昨日のアレ、どういうこと？」

「へ？」

すっかりいつもの修兄の口調にもどっている。

あんまりエラソーに上から目線で聞いてくるから、

呆れるのを通り越してびっくりして。

なんとも間の抜けた返事をしてしまった。

「約束しただろ、ちゃんと話してくれるんじゃないかなかったっけ？」

「え？別に、・・・何もないよ！

ていうか、昨日アイツにいろいろ聞いてたじゃない。知ってるんだ

からね。」

私がない間に早川とコソコソ話してたの、知らないとも思ってるの？

「そりゃ、両方の言い分聞かないと、不公平だろ？」

なんでそんな嬉しそうな顔するかなあ？

なんか心配して損したってカンジ。

その話はもう終わったと思って安心してたのにー。

さっきの自分の行動は棚に上げて、私だけ追及されるなんて理不尽だ！

ってそう思うのに、無視できない自分が悔しい。

「なんか取り調べされてるみたいで、・・・やな感じ。

別に悪いことしたわけじゃないのに。」

ブツブツ文句言う私に、どこまでも修兄は威圧的で。

「言いたくないってコト？」

「まあ、それもあるけど。」

「けど？」

ああもう、しつこいよっ！

修兄ってばこんなにしつこいタイプだったっけ？

そもそも言い訳しなきゃいけないような関係でもないし。

曖昧な返事でどうにかはぐらかそうとしても、全然上手くいかない。

こっちもいい加減腹が立ってきて、

「私、・・・何でも修兄に話さなきゃいけないのかな？

修兄だってっ、修兄だって言いたくないことくらいあるでしょ？

聞かれたくないことあるでしょ？

さっきだって・・・！」

勢い余って出ちゃった言葉に、しまったと口に手を当ててみても、

時すでに遅し。

「さっきって・・・？」

「あ、いや、えっと・・・、」

咄嗟にごまかす言葉も見つからず、言いよんでいると、

「何？」

って、も1回聞いてくる修兄の口調が強くなる。

「違うの、あのね、・・・さっき、ほら、

修兄ちよつと、・・・変だったから。

いつもと違うっていうか、その、・・・だから、何かあったのかな
って。」

「何かって?」

これ以上言っていないものかどうか、迷う暇もなく私は壁際に追い詰
められた。

「あの、・・・あのね、お姉ちゃんが見たんだって。

修兄が女の人と一緒にいて、・・・その人、泣いてたって。

それって、・・・レイナ、さん、・・・でしょ?」

自分の目で見ただけでもないのに、

本人に向かつてこんなこと聞いちゃう私は、どうかしてる。

触れてはいけない部分に触れていると自覚してるから、目線が泳い
でしまう。

修兄の迫力に負けて、思わず白状しちゃったものの、

怖くてまともに顔が見れなくて。

上目使いにチラッと様子をつかがうと、

意外なことに修兄は怒っていなかった。

片手を額に当てて何かを考え込んでいる様子で。

その隙にそーっと顔をあげていくと、

修兄の長い人差し指におでこを思い切りはじかれた。

「いったーい!!」

あまりの痛さに両手でおでこを押えると、

「あのさあ、・・・フツーに考えて、俺がお前に恋愛の相談なんて、

ありえないだろ？」

したってなんの参考にもなんないし。

それとも何？なぐさめてくれたりするわけ？」

修兄はからかうように、どんどん顔を近づけてくる。

さっきのイタズラの余韻で、

そんなちよつとした動きにも過剰に反応するカラダ。

「やだ、ちよつと、向こう行って!」

ぐいつと両手で顔を押しつけて、どうにか壁際から脱出した。

「いって！加減しろよなー、ったく。」

と首をひねりながら言うと、

「・・・そんなに聞きたい？」

「うん。」

「ヤダ、言いたくない。」

「何それ、ム力つくっ！」

「そう簡単に教えてたまるかよ。」

「あつそ。じゃあもう絶対、聞いてあげないからね！」

「いいもんねー。」

あかんべえまでされて、なんかすっごく腹立つんですけど。

まるで子供の喧嘩みたいで、言い返すのもばからしくってやめた。

だけど、そんなのは修兄の精一杯の強がりなわけ。

「・・・話したって、どうにもなんねえよ。」

私じゃ何の力にもなれないってわかってはいても、

最後に独り言のように吐き出されたその言葉が、

小さな棘みたいに胸をチクリと刺した。

第十五話：接近2

ようやく訪れたいつもと変わらない光景。

床に敷かれたコottonのラグの上で参考書とにらめっこして、
うんうん唸っている私を、

椅子の背もたれを抱いて座る修兄が見下ろしている。

ふいに視線を上げると、 目があった。

「ん？」

つて目だけで聞いてくるから、

首を振って、何も無い事を伝えた。

これもいつものこと

なのに頬がカツと熱くなるのが触らなくてもわかる。

なんで？

さつきから、どうしても集中できない。

目の前に座る修兄が気になってしまう。

さつき抱きしめられた後遺症とでも言おうか、

修兄が視界に入るだけで、Tシャツ越しに伝わってきた体温とか、
全身が包み込まれた感覚とか、

リアルすぎるほど蘇ってきて、何にも考えられなくなっちゃって。

さつきから、何度か顔を上げるたびに目があつて、

視線を戻すけど、何も頭にはいつて来なかった。

「進んでる？」

とうとう修兄がそばまで来て、私の右隣に座った。

進んでるわけじゃないじゃない。知ってるくせに。

のぞき込まれたノートには、問題だけしか書かれてない。

「全っ然できてないじゃないか。」

頭の上に修兄の頭がコツンと寄せられた。

言葉の割には、声が優しい。

「どした？」

ゾクリ。

耳元で囁くような声に、体が震えた。

言えないよ。修兄のこと考えてたなんて、言えない。

いつの間にか修兄の左手が私の背中の後ろにつかれてる。

顔が近すぎるように感じるのは、気のせい？

「えっと、あの、わかんないトコがあつて。」

「ふうん。それでオレに助けを求めてたのか。」

チラチラ見てたからそう思った？

そう思ってくれた方が、私としては助かるけど。

「だったら早く言えばいいのに。で？どこがわかんない？」

私が握りしめてるシャーペンを、修兄のきれいな長い指が抜き取った。

器用にくるくる回されて、私の質問を待っている。

その様子をぼんやり眺めてる私に、

「かりん？」

どうかしたのかって、修兄は不思議そうな顔してる。

修兄がさっきからいつもとなんか違うから、

おかげで私、なんか体が熱くて、胸がドキドキして、

金縛りにあつたみたいに動けなくなつて……

お願い、これ以上接近しないで！

ブルブルブルブル、ブルブルブルブル……

バイブになつてる修兄のケータイがテーブルの上でカタカタ揺れている。

助かったー！

「電話だよ？」

「そうみたいだな。」

「出ないの？」

「どうしょつか？」

修兄はズルイ。私にばかり聞くんだもん。

答えないでいると、

「じゃ、出ない。」

そう言つて、まさか電源を切ろうとするなんて！

「ちょ、切っちゃダメでしょ！」

ケータイを取り上げようとしたら、その手をどんどん高く上げて、取れるもんなら取ってみろって顔して。

もう、頭に来た！子供じゃないんだからね！

「ちよつと、貸しなさいよ！修兄！」

本気出して掴みかかつて、なんとか指先が携帯に触れたと思ったら、

あれ？音が止まった。

「切れたみたい。」

つて、舌だしてる場合じゃないでしょうが。

脱力して下ろしかけた腕を掴まれて、ようやく自分のしてるとんでもない格好に気づき、

血の気が引いていく。

自分の手を修兄の肩にかけ、胡座をかいてる修兄の上によじ登るようなカツコで、

ケータイしか見えてなかったとはいえ、これはちよつとマズイですよ。

（この状況はやばい。）

頭の中で警報が鳴るけど、もうどうしようもない。

右の手首はもう掴まれて、腰には修兄のもう片方の腕が回ってる。どうしたって身動きが取れないのだ。

そのまままるで私が押し倒したかのように、後ろへ倒れて行く修兄が、

スローモーションに見えた。

第十六話：理由

かろうじて残った左手を床に着き、上半身を支えて、完全密着は免れたけど……。

どうしよう、この格好、馬乗りになってるみたいで、かなり恥ずかしい。

フレアのミニスカートからは、腿が半分ほど見えてしまっている。

「いつまで乗っかってるつもりだよ？」

怪しい笑みを浮かべてるこの人は、何がしたいの？

冷静になろうとしてるのに、頭に血が昇って、うまくいかない。

修兄は私の反撃を待つように、黙ってこっちを見つめてるだけで。なんでこんなことになってるの？

私はいつも通り、数学の勉強見てもらいに来ただけなのに。

なんで？なんで？って疑問ばかりが、頭の中でグルグルグルまわって……。

だけど、そんなこと考えたって、状況はいつこうに変わらない。

とにかく何か言わないと……

「は、はなして？」

言い終わると同時に、私の中の天と地がぐるんとひっくり返る。

確かに両手は自由になったけど、間近には修兄の顔があって、見事に私は組み敷かれていた。

（これじゃさつきよりずっと悪いよ……。）

顔の横に着かれた両手のおかげで、なんとかある程度の距離は取れるけど。

「ああ、重かった。」

って、こんなに近づいてるのに、どうして何にもない顔して、笑えるの？

ちゃんと手を放したよって、これでいいでしょって顔してる。もう限界だった。

鼻の奥がツーンとして、涙がこみ上げるのがわかる。

修兄なら、何されたって大丈夫だと思ってた。

髪に触れられたり、ふざけて抱き上げられたりしても、

それはそれで嬉しかったし、どうってことない顔して笑っていられたけど、

今回は無理。

今までだって別に平気なワケじゃなかった。

心臓飛び出しそうなくらい、ドキドキしてた。

でも、修兄が好きだったから、

女の子として見てくれてるのになって、やっぱり嬉しくて。

勝手だね。

妹扱いがイヤだったくせに、妹以上を求められるのがコワイ。

今まで平気なフリしてきた私が悪いのかな？

もつと先に進んでも、大丈夫って思われちゃった？

どっちにしたって修兄は、私を好きなワケじゃない。

なのに、どうして、こんな・・・？

涙があふれ出すまでに、一つくらい思ってること言いたかったけど・・・

「ブルブルブルブル、」

放りっぱなしになってたケータイが、また音をたてた。

「結構、しつこいなあ。」

修兄の視線がケータイに向いた隙に、手の甲で涙を拭う。

間一髪だ。

「なんだ、メールか。」

そう言っただけ画面の文字を追う修兄の瞳は、とっても愛おしいものを見つめるように優しくして。

きっとそのメールの相手を思いながら、読んでいるのだろう。

「かりんの言うとおりだよな。」

「え？」

視線をケータイの画面から外さないままで、ふっと笑みを浮かべた

修兄が話しだす。

「レイナさんにも言われたんだ……。かりんだって年頃の女の子なんだから、BFの一人くらい、いたって全然フツーだって。」

秘密にしたいことだってあるってさ。

そりゃあそうだよな。

オレ……。なんか勝手にかりんの保護者、みたいな気になつてたのかもしれない。

オマエ昔っから、

『修兄ちゃん、修兄ちゃん。』って言って、

俺の後ろばつか着いてきてたから。

だから、いつまでも子供みたいに思ってた、なんつーかその、ずっとそうだって思いこんでてさ。」

修兄は、懐かしい記憶の中にいる私を見ているのか、あらぬ方向に目をやっている。

「ホント勝手だよな。」

他のヤツと、仲良さそうにしてるの見たら……。どういっわけかな気分でさ。

ちよつとイジメたくなつたつーか。

……。マジゴメン、やりすぎた。」

一度もこちらを見ないでそこまで一気に言つと、修兄は体を起こし、私の両方の手首を掴んで、引き起こしてくれた。

照れくさそうに、ポリポリ頭をかいている。

わたしはただただビクリして、いつのまにか涙も止まってた。

さっきまで自分の身に起こってたこと、今修兄の口から出た言葉、全てが信じられなくて……。

第十七話：告白？

「私はっ、

私は修兄が好きだよ。昔からずっと、今でも。

だけど・・・

それがどういう好きなのか、自分でもよくわからないの。

私だって、修兄がレイナさんの話す時の顔とか、海で仲よさげに
してるトコとか、

イヤだったよ。見たくなかったよ。

でも、修兄とって私は妹で、

そこまで言って、はっとした。

慌てて自分の口を両手で覆う。

いきなり、核心に触れてしまった。

自分でさえわかっていないホントの気持ち。

ここまでいうつもりなかったのに。

私って同じ失敗繰り返すタイプなんだわ、きつと・・・。

「かりん・・・。」

困ったような修兄の顔がぼんやり歪んで見えた。

「ごめん。」って言われたくなくて、ぎゅっと目を瞑ると、

飲み込んだ言葉の代わりに、涙がこぼれ落ちていった。

修兄の言いたいこと、わかっているから、知ってるから、

だけど今、その声で聞きたくないよ。

ぼんと頭の上に大きな手のひらが置かれて、引き寄せられると、

額が修兄の胸にトンとぶつかった。

「オレにとってかりんはさ・・・、

いや、やっぱりいい。

今日のは全面的にオレが悪かった。

だから、頼むからそんな顔・・・、」

優しく諭す様な低い声が、触れているところから直接響いてくる。

フルフルと首を横に振るしかできない私の頭をよしよしと撫でてくれる掌が暖かくて。

修兄にとって、私は？・・・何なの？

ちゃんとしため刺してくれないと期待しちゃうじゃない。

もう、泣きやみかけているのになんだか離れがたくて、いつまでも俯いている私に、

「ちよつと待つてろ。」

そう言つてウインクして、修兄は部屋を出ていった。

「はあ。」

今まで生きてきた中で一番大きなため息が出た。

腰が抜けたみたいに、へなへなと床に座り込んだまま動けなかった。掴まれた手首に修兄の手のひらの温もりが感じられて。

「修兄のこと好きだけど。」

確かに自分の声がそう言つてるのに、なんだか他人事みたいで信じられなかった。

「好きなの？」

今更だけど自分自身に問いかける。

好き、だけど、そういう好きなのかな？

あれじゃまるで愛の告白みたいだったけど、私、修兄のこと、そんなふうに好きなの？

みか達にした言い訳を思い出しながら、自問自答してみる。

付き合いたいなんて思つてないのに誰にも渡したくない。

どうにも説明のつかないこの気持ちは、いったい何なのだろう。

少しだけ開いたドアの向こうから、階段を上がってくる足音と共に修兄の話し声が響く。

さっきの電話、かけなおしたのかな？

「・・・わかった。」

そこで待つてて。すぐ行くから。」

修兄の声にはらしくない程余裕が無くて、よくわからないけど胸騒ぎがした。

けど今は、あたしが聞いちゃいけないことのような気がして、
「出かけるんでしょ？いいよ。」

電話が切れたのを見計らって、声をかけた。

「え？ああ。聞いてたのか？」

「ん、ちよつと聞こえちゃった。」

急いでるなら、戸締まりしとくよ。」

引き止めそうになるもう一人の自分に言い聞かせるように言う、物
わりのいい私。

さっきまで泣いてたことも、何もかもなかったことみたいに。

「そっか、んじゃ頼む。鍵、いつもんとな。」

「了解。」

私の返事を最後まで聞かずに部屋から飛び出した修兄は、
ヘルメットを抱えると、ものすごい勢いで階段を駆け下りていった。
玄関のドアを乱暴に閉める音に、バイクのエンジン音が続いて聞こ
える。

ただそれだけのことなのに、一分一秒でも速く彼女の元へ辿り着き
たい気持ちが伝わってくる。

「レイナさん、だよな・・・。」

そんなの鈍感な私でもわかるよ。

焦って出ていった修兄の様子が、なんだか気にかかるけど・・・。

やっぱり二人は付き合っているんだ・・・。

修兄、全然そんなこと言っただけだったのに。

まあ、私に報告する義務なんてないんだし、仕方ないよね。

仕方がないのに、裏切られたような気持ちがして、ショックを受けて
いる私。

ほんの一瞬だけでも、自分の方を向いてくれたように思えた修兄の
気持ちは、

やはりレイナさんへ向かっているのだと思い知らされたようで。

何も期待していなかったついさっきまでの私なら、こんなに落ち込
まなかったかもしれないのに。

修兄のそういう優しさ、実はすごく残酷なことなんだって、わかってる？

抱えこんだ膝の間に思わず顔を埋めそうになるけど、いつまでもこの部屋に一人でいると、泣いてしまいそうで。

何とか気力を振り絞って立ち上がると、修兄の机の引き出しからスペアキーを取り出す。

何度も家の戸締まりを確認して、鍵をポストに落とすと、静かに門を閉めた。

「あれ？・・・望月？」

呼ばれて振り向くと、そこには早川が立っていた。

第十八話：訪問

「ど、どしたの？」

滲んだ涙を慌てて手の甲で拭う。

誰にも会いたくなかったのに、なんでよりによって？

でも、考えようによつては、ちょうどよかった？

早川には悪いけど、このまま部屋に戻つて、一人でいるのは寂しすぎるから。

暗くてすぐには気づかなかつたけど、よく見ると街灯の下にいつもの自転車が停めてある。

「夏休みの宿題、英語もう終わったつて言つてたろ？

・・・今のうちに貸してもらえないかと思つてさ。

ギリギリだとオマエの友達も当てにしてんだろうし。」

「うん、まあ、いいけど・・・。」

なるほどね。

帰りの車でやたら人の宿題の進み具合、細かく聞いてくると思ったら、そういうことか。

それにしても・・・、昨日会つたばかりなのに、あれから随分時間が経った気がする。

早川に会つたの、すつごく久しぶりみたいに感じる。

「すぐ返してくれる？次、予約入ってるから。」

「了解。」

「・・・にしても、そんなに英語ダメなの？」

「ダメなんじゃない。キレイなんだつて！」

そつというのヘリクツつていうと思うんだけど？

でも本人はいたつて真面目な顔で言つてるから、

そんなものかとなんだか納得させられて。

「じゃよろしく。」

つて今すぐ持つて来いつてこと？

意外と自分勝手じゃないの、コイツ。

「いや、オレ部活終わって、飯食ってから来たから遅くなって・・・。

ただでさえ遅い時間なのに、外で長話とかしてたらマズイだろ？親とかさ、うるさくない？」

ちよつとムツとしたのがわかったのか、慌てて言い訳する姿がなんだかわい。

そういえばシャワー浴びたばかりなのかな、

まだ乾ききらない前髪に少し癖が出ていて。

昨日二人で海にいた時間に、一瞬引き戻されて、ドキツとした。

それをさとられないように、慌てて別の話題を探そうとして、

「スゴイね。１回来ただけなのに、道わかったの？どうやって覚えたの？」

やたら早口になっちゃって、ちよつと大げさに聞こえたかもしれないけど。

方向音痴な私としては、それだけでホントに感心してしまった。

なのに、

「別に。」

なんて、簡単に言ってくれちゃって。

だけど、わざわざ家まで来てくれて、それはそれで嬉しかったりして・・・。

「じゃあ、・・・ちよつと待っていてくれる？」

「わりい。」

キイと音を立てる我が家の門をそつと開けると、玄関からそのまま二階へと、

誰にも会わないように忍び足で階段を上がる。

会っちゃったら会っちゃったで、それは別にいいんだけど、

できることなら会わずにすませたいっていうか・・・。

「はい、どうぞ。」

「サンキュ。」

人の苦勞も知らないで、パラパラとノートをめくりながら、
「やつぱお前んち、ここだよな？」

って顔もあげようとししないで。

「え？そだよ。」

何言ってるのいまさら。だから君は今ここにいるんでしょ？

でもなくんか、トゲある感じ？

不思議に思っで、もう一度早川を見ると、

その視線は「新谷」とローマ字表記された表札を捉えていて。

「ああ、あの、私、修兄に家庭教師してもらってるんだ。」

向こうは一応現役大学生だし、私、理系全然ダメだから。」

何を焦ってるんだか、自分の言葉が変に言い訳っぽく聞こえるのは
なぜだろう？

でも、どこがどうだからそう聞こえるのかわからないから、修正の
しようもなくて・・・。

「理系って数学？物理？それとも・・・」

「全般。」

「ははっ、そうなんだ。」

「笑わなくなっでいいじゃない。」

「ごめん。バカにしてるんじゃないで、意外だなと思っで。」

望月にそんなに苦手な教科あるなんてさ。

全然そんなふうに見えなかつたし。

もしかしてオレの方が点数良かつたりして？」

「さあね。」

小さく舌を出して、その質問の答えは誤魔化した。

負けてるの知ってるから、言いたくないんだよね。

「そんな完璧じゃなくていいんじゃない？それくらいのがカワイくて
いいって。」

「は？」

「だーから、ちょっとくらいダメなトコある方が、女の子はカワイ
イって言っでんの。」

「それって、守ってあげたくなるってヤツ？」

「そうそう。わかってんじゃない？」

「言われたことないけどね。」

ああ、どうして私って、こんなカワイくない返事しかできないんだろ。

だいたい何で恥ずかしげもなく、カワイイとか言えちゃうのかな、この人は。

私の方が赤面してしまうよ。

自意識過剰かもしれないけど、一緒に海に行ってから、早川の事、意識せずにはいられなかった。

ついさっきまで、頭の中は修兄のことではあったのに、自分でも呆れてしまう。

「いい加減？なのかな、アタシって・・・。」

第十九話：涙の理由

「今度から、わかんなかったら聞けよな。せつかく隣に座ってんだから。」

「そうなりやこつちも心おきなく英語のノート借りれるし?」

「そういう魂胆ね、はいはい。」

二人で顔を見合わせ、フツツと笑う。

こんな時間に学校以外の場所で、フツーに話していることが不思議で。

ちよつとワクワクして、どこかくすぐつたいような気持ち。

「とにかく、それちゃんと返してよ!」

「わかつてるよ。終わったらすぐ返すって。」

1学期の間は、毎日学校で顔を合わせていたけど、

夏休みが始まってからは、昨日まで一度も会ってなかった。

だけどそんなのは当たり前のことだし、他のクラスメートとだってそう。

でも、昨日会って、今日会って、気がついた。

『学校がお休みの間は、ちゃんと約束しないと会えないんだ・・・』

」

登校日までまだ2週間以上もある。

隣で伸びをしながら、夜空を見上げている彼は今、何を考えているのだろう。

ふいにこちらを向かれて、横顔をじつと見つめていた自分に気づき、急に恥ずかしくなる。

「後つかえてるんだからね。」

つて念押ししながら、

『ああ、そうだ。返しに来てくれたら、そしたらまた会えるんだ。』

早く会いたいから、そう言ったわけでは決してないんだけど。

「オッケ!」

弾けるように笑ってそう言ってくれたから、ホントに約束守ってくれそうな気がして、期待してしまう。

「気をつけてね。」

ようやく帰る気になれた私の口から、素直にそんな言葉が出てきた。街灯に照らされた銀色の自転車へと、彼の背中は無言のまま歩き出す。

ふいに立ち止まり、何か言いたそうに私をじっと見て、

『どうしたんだろ?』

首を傾げる私から視線を逸らした横顔が、ためらっているのがわかった。

「さっきさあ、・・・もしかして、泣いてた?」

『うっ、気づかれてたか・・・』

それでもフツーそういうこと聞くな?

せつかく忘れかけてたのに、

そこは見て見ぬ振りすべきトコなんじゃないの?』

本人も多少気を使ってたか、全然こっちを見てこない。

「さっき、修一さん出て行くの見たんだ。」

なんかすつげえ急いでたみたいだったけど、・・・なんかあった?」

答えられずに俯く私に、

「ゴメン!今のナシ、やっぱ帰るわ。」

拝むように顔の前で両手を合わせて謝る。

『そんなことするくらいなら最初から聞かなきゃいいのに。』

「レイナさんから電話あったみたいでさ、

修兄ってば、すっごい勢いで出てったよ。

なにもあんなに急がなくてもさあ・・・。」

せめて笑い話にしまえたらと、終わりがけた話をあえて蒸し返す私。

できるだけフツーに、なんてことない顔して話しているつもりなんだけど・・・、

どうなんだろう？

早川の言いたいことが、わからないわけじゃない。

ただ、何が悲しくて泣いていたのか、自分でもはっきりしないのに、腫物に触るようにされても困るから・・・。

彼は触れない方がいい話題に触れてしまったことを、

後悔しているような顔をして。

何て言ったらいいのか、かける言葉が見つからないって顔してるけど。

第二十話：ファイト

「うーん。相手があの人じゃなあ・・・。」

そりゃ、フラレても仕方ないって。」

ずいぶん考え込んでたクセに、ようやく出てきたセリフがそれなわけ？

どういう結論を導き出したら、そういう言葉が出てくるの？

あまりにもストレートすぎて、怒りより驚きが先に来る。

っていうか、別に私フラれてないと思うんだけど。

だって、付き合いたいとかそういう好きじゃないんだし。

ていうか、早川、私が修兄のこと好きだと思ってたの？

どンドン浮かんでくる疑問符の渦の中から私を引き戻すように、早川が追い打ちをかけてくる。

「あれ？違ったか？」

自分がヒドイこと言ってるって自覚あるのかな・・・、コイツ。

「違う！私は別にっ、別にフラれてなんかない・・・」

ムキになって言い返ししながら、こみあげてくる熱い何かに邪魔されて、

それ以上は声にならなかった。

向こうはそんな私の様子を肯定と受け取ったらしく、さも満足げに

「やっぱフラれたんじゃない。」

「うるさい！何回も言わない！！」

もう恥ずかしいのか情けないのか、自分でもわからなかった。

あんまり腹が立って、ことのいきさつを説明する気にもならない。

怒りにまかせて思わず振り上げた手を、

下ろせずにギュッと握りしめていると、

「よし、こい！」

って両手を合わせてパンと叩くと、キョトンとしてる私の方に掌を向けて、

かかってこいと人差し指の先をくいくいと曲げる。
さつきとはまるで別人みたいなキラキラした目で、腰を落として身構える。

正直、突然そんなこと言われても、はあ？って感じなんだけど、
何とも体育会系なその発想が笑えてしまって、
ついついその気になってしまった。

一応ボクシングばく左右交互にパンチを繰り返しながらも、
「こ、こんな感じ？」

あんまりこんなやつたことないから不安で聞かずにはいられず、
そつと彼をチラ見すると、見たこと無いような、
優しい、労るような視線を向けられて。

「全然ダメ。腰が入ってない、腰が。」
そんなキツイ言葉もわざとにしか思えない。

「ちよつとは運動しろよ。体力ないヤツは遊んでやんねえぞ！」
それって一体どんな遊びよ？

想像したら恐ろしくなって、苦笑いを返すしかなかった。

やなことは、体動かして、汗かいて忘れろってことなのかな？

だんだんリズムに乗ってきて、ちよつとはコツがつかめてきたのか、
パンチのたびにパシッ、パシッと、いい音がする。

「いって、ちよつ、お前、だんだん強くなってない、か、っておい
！」

「こいって、言ったの、そつち、でしょーが！」

もう息も切れ切れで、ホントは限界だったんだけど、
ついつい強がっちゃって。

最後に一発、スゴイのお見舞いしてやろうとして、思い切り腕を引く。

なのに、その渾身の一撃は、

拳ごと早川の手のひらでがしっと掴まれてしまった。

「そつはいくかったの。」

得意げにしている早川のおっきな手から逃れようと、

どんなに引つ張つても抜けなくて、

もう片方の手で、指を一本ずつはがそうとするけどそれもダメ。

「参ったか！」

「うー。」

「参った？」

「参らない！」

結局自分が勝ちたがるんだから、いい性格してるよね。

体育会系ってみんなこうなのかな？

いつまでたっても解放されない自分の右手をまじまじと見つめ、
やっぱり男の子なんだなあって、力の差を感じてしまう・・・。
すっかりおとなしくなった私に、

「降参？」

なんてわかりきったこと聞いてくる。

悔しいから絶対言いたくないけど、言うまで許してくれないんだろ
うし。

「・・・降参。」

「よしよし。」

早川は一人満足げにうなずき、ようやく私の拳は自由になった。

第二十一話：知らなかった気持ち

停めた自転車にゆっくり歩み寄り、

「じゃあな、これサンキュ。」

振り向きざまに敬礼のような仕草をして見せる。

「うん。おやすみ。」

サドルに跨って、少し高くなった彼を見上げる私の頭に、男の子らしい節の太い指が伸びてくる。

またデコピン？と思わず目をつむって身構えていたけどいつまでたつても、なんの痛みも衝撃もない。

そっと目を開けると、その手はふわりと髪の上を滑っていった。まるで壊れ物を扱うように、ゆっくりと、繊細に。

「なんちゅー顔してんだ。帰れないだろ？」

「へ？」

なんて間の抜けた返事してるんだろう。

だって、言われてる言葉の意味がわからない。

「大丈夫か？」

覗き込むように顔を傾ける早川の、心配そうな声が胸に染みて、染みすぎてまた泣きそうになってたら、

「ほらあ、その顔！」

って、ああ、そういう意味か。

そんなの私に言われたって、そっちが優しいこと言うからなのに。そういう無意識に出る優しさが、私の中で修兄と重なる。

そのせいで余計に泣きそうになる今の私を、早川にわかっていう方が無理だよな……。

「ま、そう落ち込むなよ。俺でよかつたらいつでも殴られてやるし。」

「何それ？人を凶暴女みたいに！」

「違うのか？」

もうフラレたってことになってるのも、いいやって感じで、わざわざ否定する気にもならず。

いつまでも終わりそうにない掛け合いを、無理やり終わらせようと「おやすみ！」

不機嫌そうに言う私を見て、早川はなぜか嬉しそうに笑ってる。

「おやすみ。」

って、前を向いたまま手を振るその背中が、

あつというまに暗闇に吸い込まれて見えなくなった。

あまりにあっけないバイバイに、『まるで夢の中の出来事みたい・・・』

そんな不思議な気分浸っていると、

「かりん？表にいるの？」

玄関の灯りがついて、お母さんの声がする。

「はい！」

重ね着したタンクトップから出た腕を庇うように抱きしめながら、玄関へと歩き出す。

『さつき、この腕ごと全部抱きしめられてたんだ。』

せつかく忘れてたのに、また思い出してしまつて、顔が火照ってくる。

修兄のおかげで、というか修兄のせいで、私にも『人恋しい』って言葉の意味が、

何となくだけどわかったような気がした。

今までは、なんか都合いい言葉だあって、『寂しい』と同じじゃないの？って、

ただそれだけだったけど。

キスさえしたことない私がこんな事に気づく事自体あり得ないと、自分でも思う。

みんなが色々えっちな話とかしてるの聞いても、正直理解できなかつたし。

別れようと思ってる相手とずるずるHしちゃうとか、

彼氏がいないと元彼に会いたくなっちゃうとか、そういうの、どっちかっていうと軽蔑してたかも。

でもね、話聞いてもらうだけでも、それだけでも、相手が異性の方がいいと思うときってあるんだなって、さつき、早川を見送りながら、そう思ってしまった私がいた。

泣きそうな私の頭の上にのせられた手のひらに、心からほつとしたから。

他の誰かに思いを残しているのに、修兄を呼び出すレイナさんを許せない自分がいるのに、

修兄のこと気にしながら、早川の優しさに慰められてる。

結局私のしていることは、レイナさんと変わらないのかもしれない。もちろん、自分を好きって言うてくれる人の気持ちを利用するようなことは、

許せないと思うし、私は絶対しない！今までならそう言いきれた。人の気持ちって、理屈だけじゃ割り切れないこともあるってよく言うけど、

こういうことなんだろうか？

『そんなこと、疑問にさえ感じたことなかったのに』って、軽い自己嫌悪に陥りながら。

『さつき修兄の腕が私を抱きしめたのは、きっとそれだけ苦しい恋をしている証拠なのかもしれない。』

そんなふうに思える自分があるなんて、自分でも知らなかったこと。心はあんなにレイナさんを追いかけているのに、私に触れた修兄を許せてしまう。

あの時の修兄は、私に何を求めていたんだろう？

たとえ相手が好きな人じゃなくても、誰かの温もりを求めてしまう瞬間って誰にでもあるんだろうか？

せめて、その『誰か』は誰でもいいわけじゃないと思った。心を許している人？

一緒にいて安らぐ人？

そういうことしても怒らない人？

修兄にとって私はどれにあてはまるのかな・・・？

私にとって、早川はどれにあてはまる？

第二十二話：尋問

リビングに顔を出さずに、自分の部屋に上がってしまった私に、
「かりん！お風呂入んなさいよ！」

階段の下からお母さんの声がする。

「はい！」

とりあえず返事はしたものの、もうちょっと落ち着いてからじゃないと、

お母さんの顔まともに見れそうにないよ。

枕に顔を突っ伏して、出てくるのはため息ばかりだった。

「はあ〜。」

ケータイの画面を見つめ、

「明日、だよね・・・。」

『そうだよ、明日、みか達来るんだ。』

もういろんなことがありすぎて、何を話したらいいのかわからない。
自分がどうしたいのかも、どこまで話していいのかも。

わからないことだらけで、ぐちゃぐちゃの頭の中。

そのままタオルケットにくるまって、うとうとしながら、

「あ、冷蔵庫にブドウ入ってるの、修兄に言うの忘れた・・・。」

『メールしとけばわかるよね？』

寝ぼけながらケータイを開くと、青い光が眩しくて思わず目をそらす。

『まだ二人、一緒なのかな・・・？』

そう思うと、ケータイを鳴らすのも気が引けて、

そのままパタンとたたみ、目を閉じた。

朝方、ようやく眠りにつきかけた私は、夢の中で、

修兄のバイクのエンジン音を聞いたような気がした。

『帰ってきたんだ・・・。』

そう思うとなぜかほっとして、そこからお母さんに起こされるまで、

一度も目覚めることはなかった。

おかげで次の朝は、大急ぎでシャワーを浴びる羽目になり、私のあまりの慌てぶりを見て、お母さんは呆れていた。

低血圧の私には少々キツイけど、自分のせいだから仕方ない。

今日は朝から私のために、みんなが我が家に来てくれることになっている。

午後からはそれぞれ予定があるらしく、彼女たちは私と違って忙しい身なのだ。

「……おじゃましまあす……！」

私しかいないって知ってるくせに、わざとらしく三人で声を揃えて

「はいはい、どうぞー。」

笑いながら、あしらうように答える私の手に、

コンビ二袋いっぱいのお菓子が渡された。

一応気を使ってくれたのか、ただ自分たちが食べたかっただけなのか。

どっちもってというのが正解か。

玄関のカギをかけ、最後にリビングに入ると、

もう各自自分の家のようにリラックスして思い思いの場所へ腰をおろしていた。

ソファに座ったり、床に座ったり。

ガラステーブルの上にお土産のお菓子を山積みにしてから、冷蔵庫に飲み物を取りに行きかけた私の手首を、みかがグッと掴んだ。

「あー、もう、そんなのいいから！」

かりんが座らなきゃ、話始まんないじゃん！！」

「そーだよ。あたしら勝手にやるから、気い使わないで。」

ゆうきの言葉に、なっちゃんもうんうんうなずいている。

「はぁ……。」

確かに、いつも途中からセルフサービスで、

みんなしてヒトんちの冷蔵庫好きだけ開けてくれちゃってるけど・・。

最初くらいはちゃんと思うたのにさ・・。

「にしても、知らなかったなあ。かりんが早川と二人で海行く仲だなんて、

ねえ？」

いきなり本題に入られて、心の準備ができてなかったせいかな、まるで私が隠し事でもしてるみたいな言い方に、ムツとする自分を隠せない。

日頃から早川のファンだつて言ってるから、わからないわけじゃないけど、

自分はちゃんと彼氏いるくせに、おかしくない？

「だよねえ。いつのまにそんなに仲良くなつてたわけ？」

ゆうきの意見にそのまま同調するなつちゃんに、

「違うよ。それはみか達がさっ、」

慌てて説明しようとするけど、

「私はプールに行こうつて誘っただけだよ！

海なんて、そっちが勝手に行ったんでしょー？」

冷蔵庫を開けながら、すかさずみかが反撃してくる。

「それはっ、早川が行きたいって強引に・・。」

「イヤなら行かなきゃいいじゃん、ねーっ。」

「「ねーっ。」」

あーあー、すっかり一致団結しちゃつて。

「そんなのっ、断れる雰囲気じゃなかったんだって。」

なんて、私の必死の弁明も、

「ふーん。」

「ま、そういうことにしとく？」

「だね。じゃないと話先に進まないし。」

つて、まともに取り合ってくれない。

どうせ私の言い分なんて、最後まで聞いてもらえない上に、軽く流

されるだけ。

3対1じゃ、完全に不利だ。

私がこれから話すことも、ちゃんと言葉どおりに受け取ってもらえるのかどうか、

この分じゃ怪しいな。

なんかいろいろ勝手な妄想入れられそうで・・・。

とりあえず早川と海に行つて、偶然会つた修兄に送ってもらつたところまでを、

かいつまんで話すことにした。

もちろん、都合の悪いところは省略して。

ウソついてるわけじゃないから、問題ないよね？

第二十三話：尋問2

私が話をしている間にも、スナック菓子の袋が次々と開けられていく。

みんなして黙々と食べ続け、ガサゴソ、バリバリ、はつきり言うてうるさい。

『 ちょっと、みんなちゃんと話聞いている？ 』

って疑いの目を向ける私に気づいたなっちゃんは、口の中いっぱいにしたままで、

「大変だったんだねえ、かりん。」

なんて、慌ててフオローを入れてくる。

残る二人も、

「海なんか行つたばかりに・・・ねえ。」

「偶然つてあるんだねえ。すごい。」

ジューズで口の中のを流し込みつつ、相槌をうつ。

「私もビックリした。」

あんなこと実際に起こるなんてね。

「でも、直接見ちゃうつてのはキツイかも。」

「うんうん。凹むよねえ。」

「やっぱショックだった？」

「ショックっていうか、やっぱりっていうか・・・、複雑な感じ。」

返事をしながら、そのシーンを思い浮かべて。

「でも、おかげで自分の気持ち、ちゃんと自覚できたんじゃない？」

「うーん・・・。」

相変わらずみかは容赦なくつつこんでくるなあ。

「私だったら絶対耐えられないな！意地でも電車で帰ってくるね。」

かりん、よく車なんか乗ったよね。」

興奮気味に話すゆづきの言葉に、そう言われればそうだなと、今さら思ったり。

「ダイジョブだったの？」

心配そうに私の顔を覗き込むなっちゃんに笑い掛け、

「うーん、なんとかフツーにしてたつもりだけど……。」

はつきりしない返事しかできない。

だってもう言っちゃったわけだし。

バレてようが何しようがカンケーないんだもの。

「泣かなかったただけでもエライよね。よく頑張った！」

「泣かないよ、さすがに！」

……けど、早川にだいぶ救われたってのもあるかも。

バカ話してるだけでずいぶん気が紛れたし。」

一瞬、別れ際の早川の顔が浮かんで、焦った。

顔が赤くなってるだけか、バレないように頬に触れてみる。

よかった、そんなに熱くない。

「ふーん。……それって、早川気づいてたんじゃないの？」

何か含みのある言い方するみか。

「何が？」

「だから、かりんが修兄を好きってことにさ。」

「えー？」

あんまり早川の話をしてると、余計なこと言っちゃいそうだから、

早く終わらせたいんだけどな。

泣いてるとこ見られた上に、慰めてもらったなんてバレたら！

想像するだけで、ぞっとする。

「気づいてないと思うけどな……。」

自分で言っても、しらじらしいなと思いつつ。

みんなの視線が痛くて、ごまかすように冷蔵庫へ向かった。

「いや、その場にいたら、たぶん誰でもわかると思う。」

かりん、わかりやすいから。」

「気づいてないフリしてくれてるんじゃない？」

早川優しいからなあ。」

「まあ、優しいとは思っけど……。」

そこはなぜか素直に認めてしまった。

「で？ウチまで送ってもらったんだ。」

「うん。」

「いいなー。私も送ってほしー！」

ゆっき、どんだけ早川ファン？ってくらい、いちいち反応してくるから、

「うるさいよ。」

みかに一喝されて、

「あーい。」

ちよっぴりだけど、おとなしくなってくれて、ホッとしてる私。

第二十四話：自爆

「昨日力テキヨの日だったんでしょ？」

「うん。」

即座に話を軌道修正してくるみか。

やっぱ、手ごわいなあ。

「ちゃんと言ったんだー！スゴイ、根性あるー！かりん。」

それに比べると、ゆうきの反応は、いつもわかりやすくていい。

「そんな大げさなもんじゃないよ。」

行かないと、次、もつと行きづらくなるから・・・。」

「まあね、それは確かにそうかも。」

「思いきって行ってよかったと思ってる。」

行つて正解だった。」

自分に言い聞かせるように繰り返す。

「修兄、何て言ってた？」

「何が？」

キョトンとして聞き返す私に、

ゆうきはいらだちを隠せない様子で。

「何って、決まってるでしょ。」

レイナとかいう人とどうなってるのか聞かなかったの？

付き合ってるのか、ただのサークルの先輩なのか、

聞いたんでしょ、もちろん！」

みんなが一気に身を乗り出してくる。

「そんなの聞けないよ。」

ぼそつと呟くと、

「聞きたくないだけでしょ！」

決定的なことと言われるのコワイから。」

ゆうきにバカにしたように言われてムッとして。

「それどころじゃなかったんだって。」

こつちがなんか誤解されてて、いろいろ聞かれて、それでもういっぱいになって・・・。」
頑張って言い返してみるけど、言っちゃいけないことだらけなんだもん。

自分で言っても、説得力ないのがわかる。

さつきから隠さなきゃいけない方にはっかり神経が集中して、一体何のためにみんなに来てもらったんだろ。

「はっつきりフラレた方が、次行けるからいいのに。」

「え、もうフラれてるでしょ。」

「それにしても元氣じゃない？」

間違いではないにしても、あまりの言われように、だんだんムカムカしてきて、

「元気で悪い？」

言つときまずけど、私、別にフラれてないから。

みんなしてフラレたフラレたって、いい加減失礼だったの！

昨日だって、早川に散々っ、」

思わず出した自分の大声にはっとして、体中の血の気がサーッと引いて行くのを感じた。

誰も何も言わないから、余計に変な汗が止まらない。

「昨日？」

なっちゃんは何の悪気もなく、不思議そうに首を傾げる。

「かりんちゃん。確か海行ったのって、おとついだよねえ？」

「あの、えと、だから・・・。」

「あのねえ、かりんは、私とかゆうきとは違って、隠し事とかできるタイプじゃないんだからね！」

どうせバレるんだから、最初から正直に言っただ方がいいって。諭すようにみかが迫ってくる。

「バカだねえ。余計なこと言うからバレるんだって。」

ゆうきは床の上で笑い転げてるし。

「慣れないことするから・・・。」

なっちゃんにまで言われると、余計トホホな気分になる。

「別に隠してたわけじゃ、・・・関係ないから言わなかったただだよ。」

「ふーん。で？昨日がどうしたの？」

もう誰もお菓子に手を出そうとはしなかった。

三人とも私をじっと見つめて、話したすのを待っているのだ。

「ノートをね、英語のノート、借りにきて・・・。」

「「「借りに来て？」」」

こんな時だけ息ピッタリだし。

「・・・帰った。」

「はあ？それで終わりー？」

「往生際悪いー。」

「もう全部吐いちゃいなって！ラクンなるよー。」

刑事みたいなセリフ言って、ほくそ笑んでるみんなの顔がコワイ。

「言うわよ！！言えばいいんでしょ、言えば。」

昨日ノート借りにきた早川にも、みんなと同じようなこと言われたの！

人のことフラレてかわいそうな人みたいに・・・。

レイナさんが相手じゃ、勝ち目ないみたいに言われてさ。」

自分で言いながら、何もかもが情けなくなってくる。

改めて口に出してみて、目の前に突きつけられる現実。

目をつむって見たところで、何も変わらないのだ。

「ま、認めたくない気持ちにはわかるけど。」

フラれることは恥ずかしいことじゃないんだからね。

お子ちゃまなかりんには、いい経験って気もするし。」

慰めてくれてるんだか、よくわからないみかの言葉に、力なく頷く。

「男目線だから、余計説得力あるよねえ。」

「ある意味トドメかも。」

次々に地雷を踏んでくれる二人の言葉に打ちのめされながら、今さらだけど、『失恋』って言葉が頭に浮かんた。

第二十五話：忘れ物

早川のことをしつこく聞いてくるゆうきをなんとかかわしつつ、話題はみんなの近況や、宿題の進行具合へと移っていき、

「元氣出して。」

「またメールするね。」

なんて、よくあるセリフでお開きとなった。

急に静まり返った家の中が落ち着かなくて、

電源を入れたTVに映し出された天気図。

もちろん、予報は今日も明日も『晴れ』、おまけに今夜も熱帯夜だつて。

わかつてはいたけど、やっぱりそうなんだって思うと、余計に堪える。

TV画面を眺めつつ、飲み残されたペットボトルのふたを閉めてみると、

「ピンポーン。」

ふいにインターフォンが鳴った。

「はい！」

誰か忘れものでもしたのかと思って、

そのまま玄関へパタパタ走って行き、のぞき穴からのぞいてみると、そこにはみかが立っていた。

何忘れたんだろ？

首をかしげつつ鍵を力チャリと開けた途端、

ものすごい勢いでドアが開いて。

「おじゃまします！」

その勢いに圧倒されて、呆然とする私を玄関に置き去りにして、

みかはさっさと靴を脱ぎ、リビングへと突き進んでいく。

「ちよつとお、みかー？」

慌てて鍵をかけ、追いかけて行くと、みかはソファの真ん中に沈む

ようにふんぞり返っていた。

「かりん、そこ座って！」

何？なんか怒ってるような……。

「みか、忘れ物取りに来たんじゃ……。」

「いいから座って！」

何がなんだかわからないけど、どうも戻ってきた理由は別にあるらしい。

座らなきゃ何も始まりそうにないので、言われるままにその場に腰をおろした。

「かりん、あたしに隠してることあるよね！」

「え！？」

「あるよね！！」

さつき、……全部話してないよね？」

「な、何言ってるんの、やだなあー、ははは。」

なんでもうちよつとうまく笑えないんだろ。

自分でもイヤになるくらい、ウソつくの下手なんだよね。

「はあ……。」

みかは呆れたように大きくため息をつき、

「あたしら何年付き合ってると思ってるの？」

あんだだけ拳動不審な態度とつといて、バレてないとも思ってるわけ？」

腕組みしてこつちを睨んでくるみかに、どんないいわけしても通用しない気がして、

一言も言い返せない。

「肝心なトコ、何にも言っていないんじゃないの？」

子供に言い聞かせるような、ゆっくりした口調で。急に優しい声出して、ズルイなあ。

っていうか、私の扱い方、わかってるって感じで。

「みかりん……。」

「その呼び方やメテ！！」

「もしかして、わざわざそれ言うために、戻ってきてくれたの？」
「そーよ！アンタに洗いざらい白状させなきゃ、来た甲斐がないじゃない。」

「・・・みかりん、ありがとおっ！」

じーんと来ちゃって、思わず抱きついた私の頭をよしよししながら、
「どっからどこまでがホントなの？」

かりんはわけもなくウソついたりしないと思うから、
なんか理由があるんだとは思っけど・・・。

ゆっくりでいいから、話せるそこから話してみな？」

何をどういう順番で話したのか、思いだせないくらい、
自分でも支離滅裂だったと思う。

とにかく思いつくまま一気にしゃべり続け、
心配したみかに途中でジューズを手渡された。

全部話し終えて完全に脱力している私の上から、

「お疲れさま。」

みかの声が聞こえた。

「大変だったんだねえ。」

かりんは免疫ないから、相当ショックだったんじゃない？

修兄の、そういう『男』な部分、知っちゃって。」

「・・・わかんない。」

その時はコワイって思ったんだけどね、

何でかな、ちょっと修兄に近づけたような、なんか嬉しいような気
持ちに変わっていったの。

だけど、ホントは全然、近づけてなんかなくて・・・、

たぶんあの時、修兄は、

私じゃなくてもよかったんだと思う。」

「かりん・・・。」

自分で言ってて情けなくなってきたって、

泣きそうになるのを誤魔化すように立ち上がると、

「コラ。」

と、Ｔシャツの裾をくいと引つ張られ、

「泣くんだったら、今だよ。」

「ちやーんと泣いとかなないと、後々引きずるんだからね。」

「ウソ!？」

「ホント。失恋の達人が言ってるんだから、信じなさい。」

「みか・・・。」

せつかく我慢したのに、熱いものが喉の奥からこみ上げて来て。

「しょうがないな・・・。」

私今日、昼からデートなんだけど、

付き合っただげるから。」

「・・・いいの？ヒロ君怒んない？」

「いいの、いいの！」

かりんだって、いつも付き合ってくれたじゃん？」

「ああ!・・・ヤケ酒ならぬヤケカラオケとか？」

「そうそう、ヤケマツクとかね。」

「くくつ。あつた、あつた!！」

こんなふう泣きながら笑えてる自分が不思議だった。

だいたい泣くつもりなんて全然なかったのに、

泣きたいなんて、思ってもなかったのに・・・。

みかに言われるまで、気付きもしなかった。

「かりんはすぐ平気な顔しようとするから・・・。

あんたの『大丈夫』は、大丈夫じゃない時なの！

でしょ？」

泣いたからなのか、ちゃんと全部話したからなのか、

みかが帰る頃には、私は信じられないくらい、すっきりした気分だった。

テーブルの上に散乱しているお笑いDVDを、きちんと積み上げながら、

友達ってありがたいなって、ホント心から、そう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9490c/>

Summer Vacation

2010年10月26日09時03分発行